

「第三の人間」(あるいは「無限背進」) について

——プラトン『パルメニデス』篇の一解釈(上)——

山 川 偉 也

α

1. アリストテレスは『形而上学』第一巻九章においてイデア論を批判し、その種々の難点を挙げている。そこで、彼はそれらの論よりさらに精緻な論(*οἱ ἀκριβέστεροι τῶν λόγων*)としての「第三の人間」(*ὁ τρίτος ἄνθρωπος*)について語っている。¹⁾

この「第三の人間」なる議論の下に、アリストテレスがいかなるものを念頭に置いていたかは問題のあるところであるが、『形而上学』のこの当該箇所(990b15—17. “ἐπεὶ—λέγουσιν”)に対するアプロディシアスのアレクサンドロスの注釈によれば,²⁾ われわれは「第三の人間」なるタイトルの下にそれぞれに異なる三つの議論を理解せねばならぬようである。アレクサンドロスのいうところによると、そのひとつはソフィストたちによって導入されたもので、(1)もしわれわれが「人が散歩している」(*ἄνθρωπος περιπατεῖ*)と言うなら、そのときわれわれは「イデアとしての人間」(*ὡς ἰδέα ἄνθρωπος*)が散歩しているということも、また誰か特定の人が散歩していることも意味していないのだから、散歩しているとわれわれが言っているその者は、それらとは異った或る第三の人間だ、というものである。次のは、パニアスがソフィストであるポリュクセノスに帰しているものとしてアレクサンドロスの引用しているものであって、その議論はこうなっている。(2)「もしもひとがイデアや自体人間(*ὁ αὐτοάνθρωπος*)への関与や分与によって存在するのだとすると、その存在をイデア

アとの関係において有するであろう或る人間が存在しなければならない。しかし、イデアである自体人間(ὁ αὐτοάνθρωπος, ὁ ἐστὶν ἰδέα)も、或る特定の人(ὁ τις ἄνθρωπος)もイデアに関与してあることはできない。それゆえ、その存在をイデアとの関係において有する或る別の第三の人間(ἄλλον τινὰ τρίτον ἄνθρωπον τὸν πρὸς τὴν ἰδεάν τὸ εἶναι ἔχοντα)が存在するということが残されている」。最後のは(3)「もしも一定数のものどもに真に述語づけられるところのものが、その述語づけられるものとは別に、それらから独立して存在するとするならば、——そうすれば、或る第三の人間が存在するだろう。なぜなら、述語づけられるところのものたる人間が、その述語づけられる事物と異っており、独自に存在して、個物とイデアの下に述語づけられるとするならば、個物とイデアのうえに或る第三の人間が存在するだろう。かくして実に、このものとイデアと個物に述語づけられる第四のものが、同様にして第五のものが存在し、そしてこれは無限に至るだろう。」というものである。

かくして、「第三の人間」なる名称はさまざまに異なる議論を綜括するそれであることが理解されるのであるが、アレクサンドロスはこれらの議論の最後のものを、アリストテレスの『περὶ Ἰδεῶν』に帰している。そして Ross は、この議論が『形而上学』の当該箇所に述べられているものと(990b15—17のそれが無限背進について語っていないという点を除いては)同じものであると指摘し、進んで、アリストテレスがここに念頭に置いている議論、そしてアレクサンドロスがアリストテレスの想定していると考える議論は、疑いもなく、プラトンの『パルメニデス』篇 132A,B,D—133A のそれだ、と注記している。³⁾

たしかに、Ross のいうとおり、アリストテレスは「第三の人間」論をイデア論に対して有効な批判、そしてより精緻なそれとして述べているように思われる。とすれば、アリストテレスは、プラトンが『パルメニデス』篇においてパルメニデスに語らせた批判を「イデアの独立的存在に対して有効なものとして繰り返しているにすぎない」⁴⁾のか。もしもそうなら、アリストテレスはプラトンのイデア論をプラトン自身の議論で攻撃していることになるだろう。こ

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

の想定が可能であるのは、プラトン自身が『パルメニデス』篇におけるイデア論に対するパルメニデスの批判を有効である、ないしは、致命的であると認めていたか、プラトン自身はそれを有効であるとも致命的であるとも認めなかったが、事実は致命的だとアリストテレスが考えたか、いずれの場合だけである。いずれにしても、この「第三人間」論を通じて、アリストテレスがそこへとイデアを追いつめようとしたところのものが、周知のあの *αἰσθητὸν ἄϊδιον* という無用物であるということは確実である。そして、この紛糾して意見の定まりがたいプラトンの対話篇の解釈において、或る人々はアリストテレスのこの考えと規を一にして、対話篇第一部に展開されるパルメニデスのイデア論批判が、事実、プラトンの理論にとって有効なのだとみなしたのであった。また、さらに、Vlastos のごとき人は、プラトンは、パルメニデスによるいわゆる「第三の人間」がイデア論に対して「有効だということを彼自身自信をもって信ずることもできず、かといってまた、それを人を納得させるように反駁することもできなかった」と言っている。⁵⁾ プラトンは、彼の理論にとって何かが悪いと気づいてはいたが、それを解こうとする努力もはかばかしい成果を得ぬまま、自分を悩ます *puzzlement* を批判のかたちで表現し、自己の理論をパルメニデスという批判者の手にゆだねたが、それらの批判はそのものとして認められず、不分明なままになっていたから、まさにそのものとして表わされもしなかったし、また、決定的に打ち破られもしなかったのである。そして結局、プラトンは自己の理論にとって禍となるものの真の根源をみいだすことに失敗したのである。もちろん、たしかに、この努力が開発した「『無限背進』という工夫は、ギリシアの論理気質の賞むべき所産であった」が、自分の理論にとって禍の根源となるものを求めての、結局は失敗に終らざるをえなかった暗中模索の過程において「プラトンは彼自身の理論に対してそれを向けることに苦い喜びをみいだしたにちがいない」とさえ彼は言っている。⁶⁾

しかし、或る他の人々は、パルメニデスの批判が無効であり、プラトンは読者にパルメニデスの議論にひそむ虚偽をみつけだすよう期待しているのだ、と

論じたし、また他の或る人々は、パルメニデスの議論は無効ではないが見当はずれのものであるとプラトンは考えた、と主張している。さらに、Burnet や Taylor のような注釈家たちは、パルメニデスの議論は全然イデア論そのものに向けられているのではなく、彼が批判しているのは、感覚的なものの実在性、ないしは、感覚的事物がイデアに与かることによって第二次的な種類の実在性をえるというソクラテスの考えであると主張し、『パルメニデス』篇は感覚的なものをイリュージョンだとみなす一元論者たち（メガラ学派の形式論理学者）を「からかう」ことを目的とする一貫して念の入った *jeu d'esprit* であり、また、この対話篇はパルメニデスとソクラテスという二人の偉大な chess player あるいは gamblers の会戦記録であるともいっている。⁷⁾ 否、Taylor によれば、アリストテレスがイデア論の困難として「第三人間」について語るとき、それを彼はつねにアレクサンドロスの引用するポリュクセノスの論点に帰そうとしているのであり、しかもこのポリュクセノスの「第三人間」論は、プラトンの述べている「無限背進」と何の関係もない（Burnet はこれをポリュクセノスによって導入されたと認める）のである。⁸⁾

かくしてわれわれは、この対話篇の意図・性格・その議論の評価をめぐって、さまざまな人々がさまざまに異なる解釈を下していることの一端をうかがい知ることができたわけであるが、私が以下の論において為したいと思う作業は、これらの解釈者たちの意見を検討することを通じて、なんらかの一貫した結論をみいだすことが可能でないかを探ることである。その際、私は当面の課題としてこの対話篇第一部を考察の対象とし、そして論述の方向はおのづからとくに二つの「無限背進論」、すなわち 131E—132B における「第三の人間」論および 132C—133A におけるいわゆる「Copy—Theory」を論ずることになるであろう。

2. さて、『パルメニデス』篇第一部における各議論は、一応次のように分類されるだろう。A. ゼノンの難問に対するソクラテスの解答としてのイデア論の提示、および、「いかなる事物のクラスのイデアが存在するか」について

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

のパルメニデスの質問(128E—130E) *B. μέθεξις* 批判一(事物はイデア全体をもその部分をも含みえず 130E—131E) *Γ. μέθεξις* 批判二(「第三の人間」 131E—132B) *Δ. νόημα ἐγγιγνόμενον ἐν ψυχᾷ* (132B—C) *E. Copy—Theory* (132C—133A) *H. 不可知論* (133A—134E)。⁹⁾

さて、われわれは Text そのものがわれわれに提供するものについて二つのことだけに注意しなければならない。すなわち、まず第一に、Aにおいてソクラテスの提示しているイデア論が中期対話篇、とりわけ『パイドン』篇のそれだということであって、このことに関して大体学者の意見は一致しているようである。もちろん、Robinson のいうとおり、ここには『ポリテイア』篇の「善のイデア」や知識と臆見の区別、そしてそれらのイデアへの関係に対するなんの言及もないし、『シュンポシオン』篇に見られる美のイデアに向っての登高の説もないし、また、『パイドン』篇における想起説もないのであって、イデア論のあらゆる局面を含むとはいいがたいといわなければならない。ここにあるのは、ゼノンの多くの論駁そのものを反駁するに十分なだけのものを多様を含むイデア論全体から切り取って提示したものだということが認められなければならない。¹⁰⁾ 第二に、Text をストレートに読むかぎり、ソクラテスとパルメニデスの問答において、ソクラテスが提出する各議論を次々とパルメニデスが批判し、その各批判に対して、ソクラテスはいかなる有効な反駁をもなしえないように、この対話篇第一部はプラトンによって構成されているということ。および、それにもかかわらず、パルメニデスは、ソクラテスにイデアの存在を不可能だとして放棄するようには言っていないことである。むしろ逆に、パルメニデスはイデアの存在を許容しないならば、ひとは思惟をどこに向けるべきかわからず対話能力をぶちこわしにするだろう(135B5—C3)と言っているのである。

β

1. さて、Hにおけるパルメニデスの議論が虚偽的なものであることについ

ては今日一般に認められていると思う。

Cornford は言っている：‘Parmenides clearly hints here that the following argument is not cogent; a man of sufficient intelligence could be brought to see the flaws in it. These are, in fact, not very hard to defect; and it is surprising that some commentators have overlooked this hint and taken the argument as really damaging.’¹¹⁾ Ross は言っている：「この議論はたんに dialectical だとして棄却されえないが得心のゆくものではまったくない。それは一の混同——明らかに『たぶん、それらがまさにそれら自身においてあるごとき形相は、知識の形相そのものによって知られる』とか『思うに、いやしくも知識そのものの形相といったものがあるならば、それはわれわれの世界にある知識よりもはるかに完全である、と君は主張するだろう』というような陳述の中にある——知識の形相，すなわちその本質と完全な知識の間の一の混同に由来している」。¹²⁾ Vlastos¹³⁾ も Runciman¹⁴⁾ もこの議論が虚偽的であり，プラトンはこれに答えようとすれば答えることができたはずだ，と考えている。

私は Cornford の指摘を基準にしてこの議論を判断すべきだと思う。そうすれば，「ソクラテスは虚偽を指摘していない，そしてこのことは，プラトンがそれをみつけなかったことを意味しうる」という Ross の言葉¹⁵⁾ は本当らしくなく響く。知識の形相と真の知識の区別をプラトンがなしえなかったとは，信ずることができない。パルメニデスをしてこの議論が虚偽的なものであると示唆せしめた当の人が，自分でその議論を構成しつつその議論の虚偽を摘発することができないとは不条理である。それゆえ，ここでのパルメニデスの議論は事実虚偽的でありプラトンもそう考えていた，としなければならない。

2. 次に，「いや，それは不条理です」(‘*Ἀλλ’ οὐδὲ τοῦτο, [φάναι.] ἔχει λόγον*’) というソクラテスの言葉で終る *A* の議論は，一部有効で一部は虚偽的，そしてその虚偽を構成する論理は *B* に解消される。なぜなら，*νόημα* はつねに或る存在するもの，多くの事物に共通して認められる或るひとつのものにつ

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

いての思惟であって、この共通的なものとは形相ではないか、とパルメニデスが質問して、ソクラテスがそれに「これまたそうでなければならぬと思われま

す」(ἀνάγκη αὖ φαίνεται. 132C8) と答えたとき、イデアは思惟の対象であって思惟作用でないということがまったく明瞭に言われたのである。そして、プラトンはこの考えを決してふたたび採用しなかった。¹⁶⁾ 「プラトンのパルメニデスは、或る批評家たちが実際のパルメニデスに帰しているところの『思惟することと有ることとは同じだ』(τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἐστίν τε καὶ εἶναι) という教説を否定する」。¹⁷⁾けれども、この議論に加えて、パルメニデスがもちだした議論は或る意味で虚偽的である。なぜなら、このところでパルメニデスは「ではどうか、それによって他のもろもろの事物が形相に与かると君が主張している仕方によれば、それらの事物の各自は思惟から成り、かくしてあらゆるものが思惟するか、それとも、それらは思惟しないにもかかわらず、思惟であると考えなければならないのではないか」(132c9—11) と言うが、このパルメニデスの言葉の言明されていない前提は、もちろん「形相が思惟(作用)であるならば」である。しかし、このパルメニデスの前提は、*A* の最初においてソクラテスが提示した「形相=νόημα ἐγγεγνόμενον ἐν ψυχᾷς」という仮定に含まれている形相ではなく、上の批判において明らかとなった思惟対象としての形相を使用してのそれである。「精神よりほかのどこにも生ずることがそれにはふさわしくない」(οὐδαμοῦ αὐτῷ προσήκη ἐγγίγνεσθαι ἄλλοθι ἢ ἐν ψυχᾷς 132B4,5) ところのものが、それ自身から離れて外部にあるとはまったくの矛盾である。したがって、パルメニデスの前提を正しく表現するならば「思惟対象である形相が思惟作用であるとすれば」あるいは「思惟対象が思惟作用であるとすれば」となるであろう。これはまさに概念—矛盾である。しかし、この虚偽的な前提を用いてのパルメニデスの議論の骨組みは、*B* におけるパルメニデスの議論のそれとまったく同じである。それゆえ、この議論の構造のプラトンのイデア論に対する有効・無効の判別は *B* の検討にゆだねられる。

3. 次に、*E* におけるいわゆる Copy-Theory に対するパルメニデスの批判

を、プラトンが致命的であるとは考えなかったことは、諸家の指摘するとおり、明らかである。その証拠は、プラトンがこの『パルメニデス』篇執筆後も形相をパターン、感覚的事物をそのコピーとして語ることを止めなかったことである。Timaeus, 29B, 48C, 49A, 50D, さらに Politicus, 285D—286ff などがその証拠を提供する箇所である。Owen¹⁸⁾ は『ティーマイオス』篇を『パルメニデス』篇の前に置くことを試みたが、彼の議論のほとんどが Cherniss¹⁹⁾ によって有効に反駁された。

4. かくして、われわれが上の 1, 2, 3 において *H*, *A*, *E* の各議論を吟味した結果は次のとおりである。*H* におけるパルメニデスの議論は事実虚偽的であり、プラトンもそう考えていた。*A* におけるパルメニデスの批判は一部有効で他は虚偽的、そして虚偽を構成する論理は *B* に解消。*E* におけるパルメニデスの議論を少なくともプラトンは有効でないと考えた。以上である。

それゆえ、以下に果さるべき課題は、まず *B* を考察し、次いで *E* におけるパルメニデスの議論がプラトンの理論にとって事実有効であるか無効であるか、致命的であるか致命的でないかを考察することである。その際、わたくしはそれぞれに対する諸家の解釈の分析をもって、この考察を進めることにしたい。

γ

1. *B* におけるパルメニデスの μέθεξις 批判がプラトンの理論に対して有効であるか否かについては諸家は意見を異にしている。いま、われわれはそれらの意見のあらゆるものをここに扱えないから、その批判が無効だとする論者には Cornford をえらび、有効だとする論者には Ross および Runciman をえらび、しばらくそれぞれの理由を聞いてみることにしたい。

Cornford: 形相の個物への内在がアカデメイアで論議されたという証拠がある。アリストテレスは、形相はそれらが感覚的事物のうちにあるのでなければ、事物の存在にとってなんの役にもたたない、という所見を述べている。アプロディシアスのアレクサンドロスはアリストテレスの περὶ ἰδεῶν *B* (Frag.

189R) からイデア論に対する批判を数え挙げている。……これらの批判は、エウドクソスが、ここでのパルメニデス同様に共有を物質的に考えていたことを示している。パルメニデスによって提起された批判は、アリストテレスのそれと同じである。だから、われわれのこの passage は、こういう生硬な解釈のプラトン自身による拒否だと解されるかもしれない。パルメニデスの挙げた例、大、等、小は、 $\alpha\upsilon\tau\acute{o}\tau\omicron\ \mu\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\tau\omicron\varsigma$ とか $\alpha\upsilon\tau\acute{o}\tau\omicron\ \mu\acute{\epsilon}\gamma\alpha$ とかを、部分へと分割可能な大きい事物であると想定することの不合理を明るみに出す。当時のギリシア人の言葉づかいからすれば、通常人には大そのもの、あるいは「大」がそれ自体大でないということをはっきり認めることは困難であっただろう。彼らにとっては、大そのものが大でないというのは一の矛盾だと思われただろう。²⁰⁾

Ross: この passage は、われわれが初期対話篇においてみいだすどのものよりもイデア論に対するより反省的な態度を表している。それはイデア論そのものについては疑問を表明していないが、プラトンの初期の理論の定式化について疑問を表明している。イデアについて「大そのもの」というような phrase で語ることは誤りなのではないか、という考えがあらわれはじめている。なぜならそのような phrase は、イデアである大きさをまさに他の大きい事物、個々の大きい事物よりいっそう完全なかたちで大きい或る物として扱うからである。「個物はその全体を所有するのか、一部分を所有するのか」という問が困難を生ずるのは、イデアについてわれわれがそういうふうに考えるときだけである。これに対する治療は、イデアが他の事物でなく、全体とか部分とかの区別がそれには適当でないところの一の attribute であるということをはっきりと知ることだ。²¹⁾

Runciman: この議論は明らかに字義どおりの共有説 (literal participation theory) の有効な反駁である。それは $\mu\acute{\epsilon}\theta\epsilon\sigma\iota\varsigma$ に或る他の意味を与えることによって答えられうるのみである。しかしそれは決して与えられない。そして実際、イデア論の前提内において、満足のゆくどんな意味も提出されえないだろう。したがって、形相一個物間の関係は、字義どおりであって分析可能ないか

なる意味での共有関係でもないということが確立される。²²⁾

さて、Ross はパルメニデスのこの *μέθεξις* 批判が有効であるとは言っていないが、彼は「第三人間」論が致命的な議論であると認める理由として挙げるものを、ここにおいても使用しているから、有効であると彼が認めたことはまちがいない。

それでは、解釈者たちの意見は、いかなる点において有効・無効の両極に分れたのであろうか。それは結局「大そのもの」(*αὐτὸ τὸ μέγα*) というような概念のプラトンの使用、共有論というコンテクスト内でのその使用に対する評価の喰いちがいから生じている。Cornford も Ross も「大そのもの」というような概念が両義的であって、それ自身一の大きい事物と解される危険性があると指摘する。しかし Cornford はプラトンがその両義性を意識していた、したがってプラトンはパルメニデスの議論が無効であると論じ、Ross は「*X* 自体」(*αὐτὸ τὸ X*) というような概念の危険な両義性をプラトンは十分に意識していたとはいえない、なぜなら Protagoras, 330c2—E2 における「justice は just であり, piety は pious である」という言葉に決定的なかたちであらわれているように、プラトンは *X* 自体を *X* なる事物のクラスに同化せしめているからだ。それゆえに、ここでのパルメニデスの批判は有効であると論ずるであろう。²³⁾ これらに対して、Runciman は格別の証拠を挙げることもなく、この批判が literal participation theory に対して有効な反駁であると論じているがその literal participation theory なるものが一体何であるかということについても、彼は説明を与えていない。彼がこのような正体不明のものを持ちだしたのは次のような理由に拠っている。「……しかしプラトンは形相の存在を信じつづけたのであるから、形相一個物間の関係が簡明な分析を受けえぬという根拠に基づいてそれらを否定してはならぬと信じたにちがいないのである」。²⁴⁾ けれども、Runciman の意見は、私には、まったく混乱しているとしか思えない。なぜなら、彼は少し先のところで、第一部におけるパルメニデスの議論全体の性格についてこういっているからである：「プラトンが、パルメニデスの議論

は無効ではないが見当はずれのものであると考えたということは十分にありうる。なぜなら、彼は形相一個物関係を叙述するのに彼が用いた言語は、或る他の、真の、そして定義しがたい、あるいは未だ定義されていない関係を表わすためのたんにメタフォリカルな叙述にすぎないと信じていたからである」。²⁵⁾ところで、このプラトンの信念を立証する証拠が挙げられていないことはさておき、この Runciman の言葉によれば、この対話篇における *A* (128E—130E) においてソクラテスの提示したのは、形相と個物の間の関係のメタフォリカルな叙述としてのアイデア論であったはずであるが、このソクラテスの理論を仮定して、そこから不合理を導きだすパルメニデスの議論が、何故 literal participation theory に対する有効な批判と言い表わされうるのか了解に苦しむものである。かくして、Runciman の発言は、彼がその literal participation theory なるものの正体を明かさぬかぎり、取るに足らぬものである。

以上のことから、われわれは次の結論を得る。すなわち、ここの *μέθεξις* 批判が有効であるか否かは、プラトンが「*X*—自体」というような概念の両義性について十分に意識していなかったか否か、換言すれば、プラトンはここでの議論を、その虚偽性を意識せずに構成したか否か、すなわち、そのときプラトンは自分の言葉を仮託したパルメニデスとまったく一体となっていたか、それとも、パルメニデスの中にパルメニデスを操るプラトン自身が隠れ住んでいたか、ということにかかっている。

しかし、われわれはそのように議論をあれかこれかのかたちで論ずることに正当性をもっているか。むしろ第三の可能性があるのではないか。プラトンはそのような概念の両義性について知らないわけではなかったし、また、この議論が構成するところのアポリアが虚偽的なものであることを知ってもいた。しかも彼はその虚偽を摘発しなかったし、実際、摘発することも可能ではなく、また、その虚偽の全容をもその真の根源においては知らなかったということが論理的にありうる。

或る意味において Vlastos の議論は、そのような第三の可能な解釈の方向を

指し示すといえよう。以下にわれわれはやや詳しく彼の議論を見ることにしよう。

Vlastos: この議論に用いられている言葉は、形相の概念を無理やりに quasi-physical location, separation, division などの不適切な名辞に置き換えて行うそれだ。だから多くの注釈家たちは、それらの言葉がつくりだす困難はまったく fictitious であり、プラトンはそれを知っていた、と推論する。しかし、この推理はまったく誤っている。なぜなら、プラトンは『ピレーボス』篇(15B—C)においてほとんど同じ言葉でその困難をくりかえし強調しているからだ。たしかに、形相のその事例に対する関係が、形相全体かあるいはその或る部分の事例との physical な合致の関係ではないということをプラトンは知っていた。そしてたぶん、彼は容易に、パルメニデスの議論はまとはずれだと答えることにより、その批判を打破することができただろう。しかし彼は、そんな安価な対話上の勝利を獲得するために、一言をも費すことはしなかったのだ。彼はその困難に到達しようと努めたが、失敗したのだ。彼に隠されたままになったものが何であるかは、パルメニデスの次のような発言の中で、大きさが self-predicational であることを仮定していることにわれわれが注意を払うなら、明らかになる。そこで、パルメニデスはこう言っている：「君が大ききそのものを分割するとして、その場合に沢山の大きい事物の各々は大ききそのものより小さくある大ききの或る部分のゆえに大きくあるだろうか……」(131C—D)。大ききという形相の或る「部分」が大ききより小さいとは、まったく確実に大ききは大きい、ということを意味している。ここの議論の困難のすべての源泉は、この self-predication assumption とその一部たる separation assumption である。もしも F-ness が F であり、しかも F-ness が F であるのは、どんな経験的個物もそれを満足させえない条件を確保しているゆえにこそそうなのだとすれば、経験的個物は所詮 F ではありえないのだ。もしもそれが完全に F であるなら、それは F-ness と同じものでなければならぬだろう。しかしこのことは、それが形相でなく個物であるという仮定に反する。もしもしかしそれ

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

が完全に F でないとすれば、それは十分に F であるとはいわれえず、たんに「欠如的に」 F である、ないしは、より劣った程度における F であると言われるのみだろう。したがって、いま F_1 がより劣った程度において個物に事例化せしめられた F である場合には、それは F でなく F_1 であるだろう。この二者択一は、明らかに、第三人間論のそれとシュンメトリカルな無限背進に導くだろう。なぜなら、もしも F_1 が或る性質だとすれば、それは形相 $F\text{-ness}_1$ によってのみ完全に exemplify されえ、したがって、個物はその場合、 F_1 でありえずただ F_2 でのみありうるだろうからだ。かくしてそれは無限に至る。²⁶⁾

ここで Vlastos が言っていることは、簡単に二つに要約されるだろう：(1) 形相は self-predicative である ($F\text{-ness}$ は F である)、すなわちそれはそれ自身の完全な事例であるが、経験的個物から独立しており (Separation Theory)、それ自身は一の個物ではなく (Non-Identity Assumption)、経験的個物はそれとの関係においては不十分なものないしは欠如的なものが完全なものに対するような関係にある (Degree-of-Reality Theory)。しかし、プラトンは Self-Predicative Assumption および Non-Identity Assumption を明瞭に意識せず、暗黙の仮定として使用した。(2) しかし Self-Predication Assumption と Degree-of-Reality Theory の組み合わせは不幸な組み合わせというべく、それはただちに(欠如という無に向っての)無限背進を生ぜしめる可能性をはらむ。プラトンはこれが気がかりであった。しかし彼はこのことを決して明瞭に見なかった。それゆえに彼はここでの議論に答ええなかった。

われわれは以上の議論から、いかなることを B に対する結論として導きだすべきか。 B は暫定的に Γ に還元される、ということである。

2. さて、われわれは次に Copy-Theory を検討しなければならない。先に見たように、ここでのパルメニデスの議論を、プラトン自身が有効だと考えなかったことは明らかであるが、事実においてはどうかであるのか。解釈家たちの意見はここにおいても対立している。私がこの論文を書くにあたって主なる議論の対象としてえらんだ解釈家たちのうち、この議論に対してははっきりした

態度を表明しているのは、Taylor (無効)、Cornford (無効)、Ross (有効)、Vlastos (non sequitur)、Runciman (有効)、Allen (無効)、Peck (無効) である。

私はまず Cornford の解釈を紹介しよう。次にそれに対する異議を構成する Ross および Runciman の意見を聞き、さらに Vlastos の解釈をかけたよう。そして最後に Allen の意見を聞こう。

Cornford: ここでのパルメニデスの批判は、プラトンは気づいていたにちがいないが、虚偽的である。なぜなら彼は形相を事物の本性におけるパターンであると語ることをやめなかったからである。プロクロスはコピーのオリジナルに対する関係がたんに類似関係にすぎないのではないことを指摘した。鏡の中の私の顔の映像は私の顔のひとつのコピーである。そして私の顔に似ている。しかしそのコピーではない。そして、「この人はあの人に似ている」は「これらの人は二人とも人間の形相に与っている」と等値ではない。だから、この人が形相(人間)に似ており、形相が彼に似ているということに支障をきたすものはなにもない。それを言うためには人間の形相がそれ自身に、あるいは第二の人間の形相に与からねばならない、あるいは、第二の人間の形相のコピーでなければならぬ必要はない。われわれが類似関係をコピーのオリジナルに対する関係と同一視しないかぎり、いかなる無限背進も生じない。……結局、この議論は、ソクラテスが共有を類似と同じものだと言おうとしたのでないかぎりは虚偽的である。しかし、形相を、多くの個物がそのコピーである一のパターンだとみなすことに反対する理由はない。プラトンはこのことを洞察していたにちがいない、なぜなら、彼は形相と個物をこれらの概念で語りつけたからである。²⁷⁾

Ross: この議論が正当でないことを主張する人たちは、オリジナルへのコピーの関係は類似関係でないと言おうとした。なぜなら、A が B に似ているなら B は A に似ている。しかしもし A が B のコピーなら B は A のコピーではないからである。しかし、この擁護はそれ自体失敗している。この関係がた

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

んに類似関係にすぎないものではないことを認めるとしよう。それでもやはりそれは類似を含んではいる。そして、二つの事物間の類似は、それが共通に持っている或る形相、或る性質を含んでいる。Cornfordは、プラトンがその批判を正当でないとみなしたにちがいないと論ずる。しかし、ここにおいても、また他においても、プラトンがこの批判を反駁しようと試みている場所はないという事実は残る。そして、われわれは、対話篇においてソクラテスがそうしているように、彼がそれを受け入れた、そして copying はたんにその関係を述べるひとつのメタフォリカルな仕方にすぎないことをよく知っていた、と推論しうる。²⁸⁾

Runciman: asymmetrical resemblance とは概念矛盾である。もしも p と q とがなんらかの点において類似しているならば、 q はこの同じ点において p に類似しているだろう。そして、この p と q に共通な属性は、プラトン理論の前提に基づけば、一の形相であるだろう。かくして、もしも形相と個物の間の関係が類似関係であるとすれば、一の明らかな背進がただちに生ぜしめられる。²⁹⁾

以上の議論を簡単に整理しておく。Cornford はオリジナルとコピーによって比喩的に表わされる形相と個物との関係が asymmetrical ではあるが類似関係であるということを認めた。それに対して Ross と Runciman は、それらの関係項をそれぞれ A と B , p と q というような記号で表わし、ともかくそれらの間になんらかの類似関係があるなら、それらは或るひとつの性質を共有しているという事実を変えることはできない。そしてそれが事実でありつづけるかぎりにはパルメニデスの批判は有効だと論じた。そして Vlastos もこのことを認めている。³⁰⁾ しかし彼はそれゆえにこの議論は有効だとは論じない。むしろ彼はここでの議論に Γ のそれとシュンメトリカルな non sequitur を見る。

Vlastos: (B_1) もしも a と b が (F であるという点において) 類似しているならば、それをそれらが類似という仕方で共有するところの一の形相 F -ness が存在しなければならない。 a と b は F -ness に、もろもろのコピーがそのモデルに類似しているように類似していなければならない。 $(B_{1.1})$ もしも a が

(F であるという点において) F-ness に類似しているなら, F-ness は (同じ点において) a に類似していなければならない。(B₂) もしも a と F-ness が (F であるという点において) 類似しているなら, それらがともに類似という仕方
でそれを共有するところの別の形相 F-ness₁ が存在しなければならない: a と F-ness はもろもろのコピーがそれらのモデルに類似しているように F-ness₁ に類似していなければならない。

われわれは第一段階と第二段階の間にズレをみいだす。二つの事物が F であるという点において類似しているという前提から, (B₁) は F-ness の存在を推理し, (B₂) は F-ness とちがう一の形相 F-ness₁ の存在を推理する。たしかに (B₁) の前件において類似的だと言われているものは (B₂) において類似的だと言われているものと同じではない。すなわち, (B₁) においては a と b が, (B₂) においては a と F-ness が類似していると言われている。このままでは明らかに第一段階から第二段階への推理は有効になされえない。恐るべき non sequitur が生ずる。プラトンの心中には第一段階から第二段階への移行を正当化する何物かがあったに相違ない。その暗黙の仮定は何か。(B₂) における前件は self-predication assumption を含んでいる: (B₃) F-ness は F である; なぜなら, もしも F-ness が F でなかったら, それは a と F であるという点において類似していなかっただろうからである。しかし, F という点における a と F-ness の類似性は, 何故 F-ness 以外の形相への a と F-ness の類似を必要とするのだろうか。これに必要な理由は Non-Identity Assumption である: (B₄) もしも x が F であるなら, それは形相 F-ness と同じではありえない。なぜなら, これが真でなかったら, a と F-ness がともに F-ness のゆえに F でありえないという理由は全然なかっただろうからである。しかし (B₃) と (B₄) は明らかに不斉合である。そしてそれらの joint assertion は矛盾に導く: (B₅) もしも F-ness が F である (B₃) なら, F-ness は F-ness と同じではありえない。なぜなら, もし何物かが F であるなら, それは F-ness と同じではありえない (B₄) からである。³¹⁾

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

けれどもしかし個物は形相に類似しているか。A が B になんらかの点において似ているなら、B もこの同じ点において A に似ているといわれるとき、この比喩がまさに正当に形相と個物、オリジナルとコピーとの関係において成り立つかどうか。形相と個物は類似しており、それらが共通にもっているところの或る性質のゆえに類似しているということをソクラテスが仮定したという証拠があるか。あるいは、むしろ、ここでのパルメニデスの議論が意識的な sophistry を混じたものであるとわれわれの見る可能性があるのではないか。先に見たように、プラトンは形相と個物の関係を *παραδείγματα* と *ὁμοιώματα* ないしは *εἰκόνες* との関係として語りつづけたことは事実であり、また、それに対する外的証拠もあるかぎりには、³²⁾ われわれはなによりもまずそのような可能性を考えてみなければならないのではないか。Allen の議論は、self-predication の提唱者たちの主張「もしも F なる個物と F それ自体とが類似しているなら、それはそれらが F であるゆえにである」がプラトンの理論に対して訴えられたいわれない主張であるという。それは奇怪であるばかりでなく人をもっとも啞然とさせるものだという。³³⁾

Allen: われわれは実体的類似と付帯的類似、同じ種類のものの間での諸事物の類似と、たんに性質において似ているにすぎないものの類似を区別しなければならない。self-predictionalist たちが imitation を論ずるとき、彼らは特殊なタイプのそれを念頭に置いている、すなわち、或るものはそれに基づいて同じ種類の他のものを作るための一のモデルとして使用されうるという考えである。しかしこれがプラトンの念頭に置いていたものでないことは明らかである。

さて、個物は形相に類似しているか。個物が形相に類似するという仮定は誤っている。鏡の中の赤いスカーフの映像を考えてみよ。その映像が一のスカーフだということは明らかに偽である。それが赤いということは本当か? あるいは、それはただひとつの赤いものの映像にすぎないか? 映像は、たしかに、種類においてオリジナルに類似していない。では、質においては類似している

か。類似しているといえ、われわれは明らかな困難に直面する。なぜなら、それが質において類似しているということは、本質的にオリジナルに依存的である映像に、それ自体において存在するものを、われわれがオリジナルについて述語づけるまさにその仕方において、述語づけを行いうるということだからだ。映像の存在そのものはまさに相対的であって、それ自身以外のものに完全に依存している。すなわち、オリジナルとそれを反映する媒体に依存している。君がそうしたいなら、一枚の赤いスカーフの映像を赤いと呼んでもいいけれども、君がそのオリジナルを赤いと呼ぶときに君が意味していると同じものを君がその場合に意味しえないのはこの理由からである。「——は赤い」の機能は、この場合、体系的に両義的である。映像はそのオリジナルに対して色という点において類似関係にあるとはいえない。なぜなら、このことは、類似を主張することによって予想される一の共通性質の univocal exemplification を意味するからだ。映像はオリジナルに類似していない、むしろそれは、オリジナルの類似物である。そしてこれがその本性であり、その本性のすべてである。「——の類似物」は準一実体的である。関係的存在であって、関係ではない。それらはそれらのオリジナルに対して、依存的なものが独立的なものに対するように、より少く実在的なものがより多く実在的なものに対するようにある。³⁴⁾

Allen は、Vlastos などが仮定する $\langle F\text{-ness と } F\text{-things が類似しているのは、それら両者が共通に所有する } F \text{ という性質のゆえにである} \rangle$ という主張の不合理を的確に暴露している。かくして、Vlastos の議論における (B_{1.1}) および (B₂) の前件は力を失う。また、Allen は個物は形相に類似しているのではなく、形相の類似物であるという論点を確立した。たしかに、プラトンは事物が形相に類似するとは言っていない。³⁵⁾ ましてや、それが或る点において(事物と形相に共通な点において) 類似するとは言っていない。しかしながら、たとえ一步を譲って、それでも Allen のいう付帯的意味においては、個物は形相に類似している、という主張を仮りに認めるとしても、それらの双方が或る単

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

一な別の形相の類似物だという結論は出てこない。なぜなら、ソクラテスの仮定により、それらは、それらの両方ともが「形相以外のもの」であるわけではなく、一方のものは、他方がその類似物であるオリジナルだからである。³⁶⁾しかるに、パルメニデスは、何物かが形相のイメージなら、それが形相の類似物であるかぎり、その形相がそのイメージに類似していないということはありません(132D5—7)、それら(相互に類似的であるもの)は同じひとつのものに与かることによって類似している(D8—E1)のだと論ずる。そしてそこから別の一つの形相を導きだす(E3—2)。かくして、パルメニデスの議論は、Vlastosの定式化(B₂)において虚偽的であるばかりではなく、(B_{1.1})においてすでに虚偽的であるのではないかと疑われる。そして実際、この前提を論理的に吟味するならば、それは自己矛盾を含んでいる。たんに、Vlastosの論ずるように、(B₁), (B_{1.1})と(B₂)との間に推論上のギャップがあるだけでなく(推論上のギャップとみえるものはギャップではなく、たんに虚偽である)、すでに(B_{1.1})でのパルメニデスの一般化の中に虚偽がひそんでいるのである。Vlastosの定式化を使用すれば(B_{1.1})「もしも a が (F であるという点において) F-ness に類似しているなら、F-ness は (同じ〈F であるという〉点において) a に類似していなければならない」における「(F であるという点において)」とか「(同じ〈F であるという〉点において)」などという点にその虚偽が含まれているのである。このことはすでに Allen の指摘したとおりであるが、Chernissはこの点をさらに議論の文脈に即して論理的に明らかになした。³⁷⁾「もしも a が (F であるという点において) F-ness に類似しているなら、F-ness は (同じ点において) a に類似していなければならない」という仮定は自己矛盾的である。なぜなら、この仮定にしたがえば、F-things と F-ness とが相互に類似的であるのは、それらが F-ness₁ を共有するからでもあり、F-ness₂ を共有するからでもあることになり、かくして F-ness₁ と F-ness₂ は一にして同じものとなるが、³⁸⁾しかしこのことはパルメニデスの仮定にしたがえば不可能である。なぜなら、もしもそれが可能であれば F-things と F-ness の双方は F-ness を

共有することによって相互に類似的でありえ、無限背進は生じなかつただろうからである。

われわれはこのような自己矛盾的前提に基づくパルメニデスの虚偽的な推論に対してプラトンが意識的でなかったと想定する必要はない。この点についても Cherniss の議論は説得的である。われわれはそれゆえに、ここでのパルメニデスの議論は虚偽的であって、プラトンのイデア論に対して有効なものではない、と結論してよいと思われる。ただ、Vlastos によって訴えられたところの non sequitur が議論の或る正当性を要求するように思われるので、それを検討することが要求される。しかし、これは I' と構造をひとつにしているから、次に I' を考察しよう。

δ

1. TMA におけるパルメニデスの議論の第一段階と第二段階の間に歴然たる “discrepancy” があり、それが第一段階から第二段階への推理を保証しないものになっている、というのが Vlastos が Self-Predication Assumption (S.-P.A.) および Non-Identity Assumption (N.-I.A.) を導入する理由であった。

すなわち、TMA の議論の第一段階の定式 (A_1) 「もしも多くの事物 a, b, c , がすべて F であるなら、そのゆえに a, b, c , すべてが F であるとわれわれの理解する或る単一な形相 F -ness が存在しなければならない」から第二段階 (A_2) 「もしも a, b, c , と F -ness がすべて F であるなら、そのゆえに a, b, c , と F -ness がすべて F であるとわれわれの理解する別の形相 F -ness₁ が存在しなければならない」への推理が保証されなければ、それは論理的に有効な批判になりえないから、たしかに、プラトンの心中には (A_1) から (A_2) への移行を正当化する何物かがあったにちがいない、そしてそれが (A_1) と (A_2) の間に介在して、(A_1) から (A_2) への推理を正当化したにちがいない、というのが S.-P.A. および N.-I.A. を導入せねばならぬ Vlastos にとっての必然性であった。³⁹⁾

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

けれども、彼の S.-P.A. の定式: (A₃)「F-ness はそれ自身 F である」および N.-I.A.: (A₄)「x が F であるなら、x は F-ness と同じでありえない」は、Geach の指摘するとおり、たんに不斉合であるばかりではなく、相互に形式的に矛盾している。N.-I.A.:「いかなる F も F-ness と同じではない」は「F-ness は非 F である」に等値であり、これは S.-P.A.:「F-ness はそれ自身一の F である」の直接の矛盾である。⁴⁰⁾ われわれはプラトン自身がこのように自明的と思われる相互に矛盾的な二仮定を用いて TMA の結論を導きだしたとは、たしかに、考えがたいであろう。すなわち、Vlastos の議論における S.-P.A. か N.-I.A. かのいずれかは少なくとも虚偽的なものなのではないか、という疑いが生じてくる。けれども、Vlastos は、(A₁) からの (A₂) の non sequitur を防ぐためには、このような二つの仮定がたしかに必要なのであり、これら暗黙の二仮定が相互にいかに不斉合であり、そこからいかに自己矛盾的な結論が導きだされようと、われわれがプラトンの言葉に忠実であろうとするなら、避けがたいことなのであって、このことはプラトンが (A₃), (A₄) のはっきりした認識に達してはいなかったということ、もしも彼がそれらを明白な意識下においていたなら、彼は全然 TMA を創りだしはしなかつただろう、しかし TMA を述べていること、また、それを反駁しないままにしておくことにおいて、プラトンは、彼がそれに必要な諸前提のすべてを知らなかったこと、そしてそこからして、彼が TMA の議論が有効なものであるか否かを決定する方途をもたなかったのだということは明らかである、と論ずる。⁴¹⁾

しかし、もしも Vlastos の TMA の議論の定式化がなんらかプラトンの体系的な誤解に基づいていたとするならば、そして、TMA の議論 そのものではなく、この議論の Vlastos の定式化こそが non sequitur というみかけを生じさせる原因であったとするならば、あるいはそうでなくとも、Vlastos の TMA 解釈に致命的な誤解あるいは欠陥がみいだされたとするならば、S.-P.A. および N.-I.A. の Vlastos の導入は、そのひとつがか、あるいは双方ともがか、その根拠を失う可能性をもつ。

Geach は、たとえば、 $\tau\acute{o}\ \mu\acute{\epsilon}\gamma\alpha$ ($\alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \tau\acute{o}\ \mu\acute{\epsilon}\gamma\alpha$) を Largeness と訳し、それをさらに F-ness という記号表現に置き換える Vlastos のやり方が、プラトンの暗黙の仮定を解明しようとしながら、そのような抽象名詞の使用によって、それ自身が暗黙の前提を形成してしまう恐れがある、と批判する。⁴²⁾ F-ness を F から作るやり方が、プラトンには関係ないところの、或るものが F なる事物に対する特殊な関係を作りだしてしまうのではないかと疑われる、というのである。実際、たとえば「ここに『F』は任意の知覚しうる性質あるいは特質を表わす。『F』と『単一な形相』の記号表現たる『F-ness』において同じ記号が用いられているのは、個物("large")において知覚せられ、形相("largeness")において思惟せられる性質が同一だということを示すものである」⁴³⁾ として、ひとたび、個物に述語づけられる性質を F、形相を F-ness によって表現することになってしまえば、TMA の第一段階「a, b, c, すべてが F であるのは F-ness のゆえにである」とその第二段階「a, b, c, と F-ness のすべてが F であるのは F-ness 以外の形相 F-ness₁ のゆえにである」は、Vlastos のいうとおり、あまりにも一目瞭然にその相違がみてとられる。

しかし、「a, b, c, すべてが F である」と「a, b, c, と F-ness のすべてが F である」の相違は、このようにもきめて自明的であると思われるので、Vlastos の主張とは逆に、われわれは、このようにも明瞭な discrepancy があるにもかかわらず、ここでのパルメニデスが第一段階から第二段階への有効な推論をなしているものと、プラトン自身にも思われ（あるいはプラトンがそうみせかけることができた信じ）、アリストテレスにもそう思われたことを不思議に思うのである。すなわち、(1)「a, b, c, が F であるのは F-ness のゆえにである」(2)「a, b, c, は F である」から (3)「a, b, c, と F-ness が F であるのは F-ness 以外の形相 F-ness₁ のゆえにである」を導きだすために (4)「F-ness は F である」と (5)「F-ness は非 F である」というような自己矛盾的仮定を用いねばならないのは、Text の不適切な記号表現がなされる場合だけではないかと疑われる。TMA のパルメニデスの議論がプラトンの理論に対

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

して有効であれ無効であれ、いずれにしても、言表されていない相互に矛盾的な假定群を用いずに、それが妥当な推論であるように読者に対して提示されていることが必要であるとわれわれは考える。あるいは少なくとも、その議論がもっともらしいものと読者にも思われ、それを構成したプラトン自身にもそれがもっともらしい推論として構成されたと納得できたものであることが必要だとわれわれは考える。Vlastos の (A₁), (A₂) の定式化は、まさしくこの必要性を無視するものである。もちろんしかし Vlastos は、この議論の第一段階と第二段階の間の discrepancy は (A₁), (A₂) という記号的表現に訴えることによってはじめて明らかになるのであって、そうでなければ明瞭にならなかったのだ、と論ずることができるであろう。しかし、プラトンがここでのパルメニデスの議論を、その第一段階から第二段階への移行の間に、あるいはむしろ移行の前に、プラトンの理論が許容しない或る種の discrepancy あるいは飛躍、ないしはすりかえがあるものとして、意識的に構成しているとするならば、そして彼がそのすりかえ、飛躍、ないしは discrepancy を容易には摘発しがたいような言語によって、パルメニデスの口を通じて意図的にその議論を語らせているのだとするならば、そしてその言語あるいは概念が、まさに τὸ μέγαとか αὐτὸ τὸ μέγαとかの彼の使用におけるそれだとするならば、Vlastos の議論における F とか F-ness のような記号的表現は、この TMA の議論を通じて、プラトンが意図的に表現しようとしたものを、解体させてしまうようなあまりにも full-strength なかたちでのそれであるといえるであろう。

そして、F とか F-ness の彼の使用があまりにも full-strength なものになったのは、「プラトンの陳述の symbolic transcript は名詞的形相 F-ness とその同じ形相の形容詞的あるいは述語的機能たる F を体系的に区別しなければならない」というような彼の考えに由来する。そして、そこからプラトンの思考には縁のない述語理論が導きだされる。たとえば、彼は 130B 3,4 のパルメニデスの言葉を ‘*And do you believe that Similarity is something separately from the Similarity which we possess?*’ (καί τί σοι δοκεῖ εἶναι αὐτῇ

ὁμοιότης χωρὶς ἧς ἡμεῖς ὁμοιότητος ἔχομεν) と訳し、この言葉によってプラトンが意味しているのは、*‘Is the property, Similarity, distinct from the property of Similarity which is exemplified in particular instances of Similarity?’* であるという。⁴⁴⁾しかし、Peck のいうように、Text には ‘Property’ とか ‘instances of Similarity’ というような言葉はどこにもない。⁴⁵⁾ それにもかかわらず Vlastos は ‘the Similarity which we possess’ は言語形態においては名詞的であるが、形容詞的意味に理解されねばならない、という。⁴⁶⁾ けれどもそのような主張にはどのような根拠があるのであろうか。たとえば、「このものは大きさに与っている」あるいは「このもののうちに大きさが内在している」というような命題は、プラトンの理論の或る文脈においては明らかに許される命題であるが、それらは、われわれが属性判断と呼ぶところのもの、たとえば、「このものは大きい」というような命題とはただちにはひとしくないのである。何故なら、「このものは大きさに与っている」という命題は、「このもの」が「このもの」以外の或る単一の形相（大きさ）への関係においてあるということを含意しており、「このもののうちに大きさが内在している」は、「このもの」の「このもの」以外のものへの依存を端的に表明しているに反し、「このものは大きい」はそのまのかたちではそのような「このもの」以外の形相への関係を表明せず、むしろ「大きい」という性質が「このもの」に述語づけられているという事態をしか語っていないからである。われわれは、形相の ‘predicative function’ としての「F」を ‘substantial Form’ としての「F-ness」から体系的に区別する必要はなく、またその権利もないのである。「F」を形相の ‘predicative function’ と解することから、「F-ness」を端的に「性質」と解することへは一足跳びである。なぜなら、個々のもの、たとえば a は F-ness のゆえに F という性質をもつからである。

2. しかし、はたしてイデアは「性質」であるか。美それ自体は美しくあり、等それ自体は等しくあると言われるとき、⁴⁷⁾「美それ自体」、「等それ自体」が完全無欠の「美という性質」、「等という性質」であり、また、「美という性

質」,「等という性質」を持っているということの意味するのであろうか。そしてそれらに与かるところのものは「美という性質」や「等という性質」である「美それ自体」や「等それ自体」を,ただ欠如的な仕方、あるいはたんに不十分な仕方で持つにすぎないのであろうか。「もしも一の F という性質をもっている」事物が＜不十分に＞F であり,それに対応する形相のみが完全に F であるなら,F-ness は F (という性質)である」といわれる。⁴⁸⁾ プラトンの Degree-of-Reality Theory は,形相がそれ自身の完全な事例であり,またそれがそれ自身の事例であるかぎりにおいて,それに与かるところの他のもろもろの事物のクラスの成員であることを含む,といわれる。「プラトンの存在論は経験的個物と知性的存在との相異を,異った種類の存在者間の相違として考えるかわりに,『不十分に』実在的なものと完全に実在的なものとの間の相違,つまり同じ種類の存在者間の相違として考える。綿とか雪とかのごとく白い事物と普遍的なもの,白さとの間の相違が実在性の程度における相違だということは,白さを白い事物と同じクラスに入れることである。それは白さを＜卓絶して＞白い物と考えることであって,それを白い物から区別する代りに,それを白い事物にカテゴリーカルに同化することである」といわれる。⁴⁹⁾ この議論は或る意味で説得的に聞えるかもしれない。しかしそれが説得的であるのは,はじめから Vlastos が実在性の度合ということで性質という同じカテゴリー内での度合を考えて議論しているからにはほかならない。プラトンの理論の文脈においては「不十分に」ということは,決して質の上でということではない。それは存在のタイプの上での相違であり,存在のタイプの上での「不十分さ」である。個物と形相は存在論的に異なるカテゴリーに属しているのである。Vlastos の「F」と「F-ness」の区別は,実際には,個物と形相の存在論的相違を没却している。ソクラテスは 130A1,2 において,明らかに,個物を *τὰ ὁρώμενα* と呼び,形相を *τὰ λογισμῶ λαμβανόμενα* と呼んでいる。そして,パルメニデスはこの区別を知っていたはずだ。なぜなら,パルメニデスは第一部から第二部への移行の途中でのソクラテスとの対話のなかで「見られるもの」と「ロ

ゴスによって捉えられるもの」のソクラテスの区別に触れているからである(135E1—3)。Peck が論ずるように、Vlastos は彼の議論をこの対話篇全体から孤立化せしめることによって、パルメニデスがこの区別を知っていながら無視しているのだという事実を見逃している。⁵⁰⁾ たしかに、プラトンの理論によって基本的なこの存在論的区別をなすならば、「一の F なる事物が＜不十分に＞F であり、それに対応する形相のみが完全に F であるなら、F-ness は F である」という主張は正しいものではなくなる。綿とか雪とかのような白い事物と白さという形相との相違は、性質の上での不完全なものと完全なものとの相違ではなく、「見られるもの」と「思惟されるもの」という存在の種類の基本的タイプの上での相違なのであって、個物がアイデアに「劣り」「不十分」であるのは、個物の具有する性質のゆえにではなく、個物はそれが個物であるところの種類のものであるから不十分なのであり、それがアイデアでないから不十分なのである。⁵¹⁾

プラトンの *χωρισμός* 理論は可視的事物からロゴスによって捉えられるものとしてのアイデアを截然と切り離す。この理論はもろもろの美しい事物が美のアイデアと美しさを競い合うことを拒否する。もろもろの大きい事物が大のアイデアと丈くらべをすることを拒否する。⁵²⁾ 「大の形相は、大きい山や大きい櫨の樹などがただ不十分に大きいのに、卓絶して大きい」などとはいえず、これとそれらを比較することがそもそも無理なのであるから、「大きい個物に付け加わる述語」と「大きさに付け加わる述語」を区別し、「大きい」、「大きい₁」というそれぞれの述語の相違にもとづき、二つの形相「大きさ」と「大きさ₁」とを考案しだして、「たんに大きい事物が、そのゆえにそれが大きいと見られる形相『大きさ』と同じでありえないだけでなく、『大きさ』そのものが、そのゆえにわれわれがそれが大きいことを見る形相『大きさ₁』と同じでもありえない」。かくして「任意の F なる個物のそれに対応する形相 F-ness からの『分離』を余儀なくさせたところの同じ推理が、任意の形相のそれ自身からの『分離』を余儀なくさせる、そして F-ness が F-ness₁ から分離する」⁵³⁾ と主張す

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

ることとはできない。かくして、fullstrength なかたちでの N.-I.A. はその証明の根拠を失う。N.-I.A. の導入はアイデアをたんにそれ自身の完全な事例と解する Vlastos の誤解に由来するものである。

すなわち、Vlastos の (A₃) 「F-ness は F である」は、それ自身誤解であり、その誤解はアイデアをもってたんに性質と解する彼の考えから来ている。彼はたとえば、プラトンの Degree-of-Reality Theory のネメシスとしての full-strength なかたちでの N.-I.A. について語るところで、それに注していっている：〈…the “perfect reality” of the Forms is incompatible with their being the (imperfect) predicates of particulars.〉⁵⁴これはまったく明らかに、形相それ自身を属性あるいは性質と考えることにほかならない、もちろん個物のそれよりは完全なそれとしてではあるが。しかし、形相そのものは性質であるか。明らかに否である。Geach はたぶん Vlastos のかかる考えを念頭において次のように言う。プラトンがこれらの形相について話す話し方は、「形相が彼にとっては、人々が従来 “attribute” とか “characteristic” とかと呼んできたような何物でもなかった、ということを示唆している。私の寝室の bed は、一の事物が一の attribute あるいは characteristic に対するようにではなく、むしろ、或る商店での一ポンドの重さ、あるいは一ヤードの長さが、ポンド基準 ((standard pound)) あるいはヤード基準に対するように、the Bed に対してある」。たしかに、このような比較は、或る意味で形相の Self-predication を紹くものだといえるかもしれない。なぜなら、われわれは普通に「メートル」という言葉を身長測定や布地の売買に使ったりするとともに、長さの基準尺度としての意味に用いたりするからである。「この布地幅は一メートルである」によってわれわれが理解するものと「メートル原器 (prototype metre) は一メートルである」によってわれわれが理解するものが異なることは明らかであるが、ともかく「……は一メートルである」という同じ述語が適用されるかぎり、形相の Self-predication が explicit なかたちにおいてではないが認められなければならない。「明瞭な Self-predication 『ヤード基準は一ヤードであ

る』とかあるいは『ポンド基準は一ポンドである』とかは、実際、普通にはいわれえないだろう。事実、われわれはそういった陳述をなすことに或るためらいを感じなければならないだろう。われわれはそれらをつまらぬ同語反復とみなすぶきか。反対に、それらを明らかな非合理とみなす或る理由がある。君が一の基準に照して長さを測ったり重さを測ったりしえないもの——それは基準そのものである」。⁵⁶⁾ それにもかかわらず、「ポンド基準が一ポンドでなければならぬ或る意味があり、一ポンドでありえない或る意味がある」そして「『F』は一方では範型 F に、他方では多くの F にたんにアナログスにのみ述語されうる」。⁵⁷⁾ しかし、たんにアナログスにのみであっても「F」が形相について述語づけられうるならば、「F-ness は F」であり、そして「……はアナログスに F である」という Geach の論点は決して十分ではない、と Vlastos は批判した。ポンド基準は「アナログスに一ポンドである」ということは、(「アナログスに」なしでの)「……は一ポンドである」がポンド基準について言われうる或る意味を顕わにするような種類の分析の予備段階として以外では哲学的論議にあっては許されない。「もしも『x は一ポンドである』がポンド基準に照して x の重さを測定する操作を媒介にして確立されたところの重量についての一の陳述であるべきならば、それをポンド基準について言うことは明らかに意味がないだろう。なぜなら、それは『ポンド基準はそれ自身を尺度として重量を測定されてきた(されうる)』という必然的に偽なる陳述を予想するからである」。「『……が一ポンドである』の通常の意味においては、ポンド基準は一ポンドでない。もちろん、この『ない』というのは、それが一ポンドだということが実質的に偽であろうというのではなく、『数3は一ポンドである』とか『上機嫌は一ポンドである』とかいった論理的無意味である」ということである。⁵⁸⁾

けれども、われわれは「……は一メートルである」という句を述語として理解することなしに、それを或るもの、たとえば身長や布地幅に付け加えることもできるし、「メートル原器」に付け加えることもできる。「布地幅が一メート

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

ルきっかりある」ということは、その布地幅が、度量衡万国中央局の地下室に保管されているところの或るもの、Pt 90%, Ir 10%の合金製の或る物指に対して或る特殊の関係を、すなわち長さにおける等しさという関係を、持っているということである。⁵⁹⁾ 個物のアイデアに対する関係、すなわち、μέθεξις と χωρισμός という事態を、このアナロジーは明快に解決する。「この少女は美しい」というとき、アイデア論のコンテクストにおいては、それはこの少女が美のアイデアに対して或る特殊の関係に立っているということを指示している。すなわち、この少女は美のアイデアという παράδειγμα への関係のゆえに美しくあるのである。他方、「メートル原器」そのものについて、「メートル原器は一メートルである」というとき、たしかにわれわれはそれでもって「メートル原器」がそれ自身への或る特殊な関係においてあるのだということを理解しなければならない。「メートル原器はメートル原器である」。それはそれ自身への自同的關係においてそれ自身にとどまっている。基準そのものとしての「メートル原器」への関係において測られるところの多様な事物の長さは、「メートル原器」が指示する値のまわりに散乱し分布する近似値となって現象するにすぎない。それらはかぎりなく「メートル原器」そのものに近接するかもしれない。しかしついに「メートル原器」そのものではない。なぜなら、それらと「メートル原器」とはタイプのうえで相違しているからである。もろもろの美しい事物がそれに与かることによって美しいといわれるところの「美のアイデア」は「むしろ純粋にそれ自体だけであるものとして、唯ひとつの形相を保ち、永遠に存在するものなのであって、その他のものはすべてこれに参与することによって美となるのであるが、しかしその参与の仕方はいかなるものなのである。すなわち他のものは生じたり滅したりするけれども、美そのものはそれによって寸毫も増減することなく、また何の影響も受けることはないのである」

(Symp., 211B1—5)。⁶⁰⁾

アイデアは個物がそれに与かるところの完全な「性質」ではない。それはむしろ個物の存在と性質が完全にそれに依存するところのものである。個物はそれ

がアイデアへの或る特殊な関係にあるかぎりにおいてアイデアと同じ名前と呼ばれる資格をもつ (Phaed., 103E)。個物は自同的アイデア「F」への関係においてのみ F である。それは「ὁ ἐστὶ F」(=αὐτὸ τὸ F)⁶¹⁾に依存しているかぎりにおいてのみ F である。個物は παράδειγμα たるアイデアに、その ὁμοιώματα として、「依存的なものが独立的なものに対するように、より少なく実在的なものがより多く実在的なものに対するようにある。⁶²⁾ かくして、プラトンのアイデア論そのものは、Vlastos が要求した S.-P.A. および N.-I.A. のいずれをも実際必要としていないのである。

3. それでは、TMA のパルメニデスの議論の第一段階から第二段階への推理は、それらの間に、プラトンにとって暗黙であった二仮定を補うことなしに、形式的に進められうるか。non sequitur は生じないか。そのとおりである。われわれは、Peck とともに、ここでのパルメニデスの議論が Vlastos の主張するようにプラトンの The Record of Honest Perplexity ではなく、虚偽的なものであることに十分注目しさえすればよいのである。もっとも私は TMA の Peck の分析の仕方には反対である。⁶³⁾むしろ私は Vlastos によってほとんど有効に批判されたけれども、TMA の議論の Geach による formal construction に共感を覚えるものである。Geach の議論の最大の難点は、それが Text に即したものでないということである。⁶⁴⁾しかし、Vlastos が彼の (5) を、「これはテクストの first step に含まれておりさえしない self-Predication を明らかに述べている」⁶⁵⁾と批難するとき、その批難はかならずしもあたらない。実際、first step は Self-Predication の虚偽を含んでいるのである。それゆえにこそ Ross, Runciman は TMA の議論がアイデア論に対して致命的であると断じえたのであり、それにもかかわらず、Taylor, Cornford は無効であると断じたのである。⁶⁶⁾すなわち、それは first step における ὁθεν ἐν τὸ μέγα ἡγῆ εἶναι における τὸ μέγα の両義性に依っている。パルメニデスはまさにこの τὸ μέγα を虚偽的に使用した。そして、この τὸ μέγα (αὐτὸ τὸ μέγα) の self-predicational な使用がプラトン本来のアイデア論のコンテキストにおいて虚

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

偽であるということは、もはやわれわれにとって明白なはずである。

TMA におけるパルメニデスの first step の議論を分析しよう。

<οἰμαί σε ἐκ τοῦ τοιοῦδε ἐν ἑκάστον εἶδος οἶεσθαι εἶναι ὅταν πόλλ' ἄττα μεγάλα σοι δόξῃ εἶναι, μία τις ἴσως δοκεῖ ἰδέα ἢ αὐτὴ εἶναι ἐπὶ πάντα ἰδόντι, ὅθεν ἐν τὸ μέγα ἡγῆ φαινέσθαι; (132A1—8)>

<ὅταν πόλλ' ἄττα μεγάλα σοι δόξῃ εἶναι> の Apelt 訳: <Wenn sich dir eine Menge von Dingen als groß darstellt>⁶⁷⁾を手がかりに、われわれは次の命題をひきだしうる。

- (1) 或る集合がある。
- (2) 或る集合は F (という性質) によって特徴づけられる。
- (3) F (という性質) によって特徴づけられる或る集合のすべてのメンバーは F (という性質) を持っている。

<μία τις ἴσως δοκεῖ ἰδέα ἢ αὐτὴ εἶναι ἐπὶ πάντα ἰδόντι> における <ἰδέα> は <the character> と解さるべきである。⁶⁸⁾ これからわれわれは次の命題をひきだしうる:

- (4) F (という性質) によって特徴づけられる或る集合に属するすべてのメンバーは同じひとつの F (という性質) そのものを共有することによって、その集合のメンバーである。

<ὅθεν ἐν τὸ μέγα ἡγῆ εἶναι> における <ὅθεν> はもちろん <auf Grund deren>⁶⁹⁾ の意味である。したがって、<τὸ μέγα ἐν εἶναι> の意味は、上の (1), (2), (3), (4) からの一の推論になっている。そして、この推論にひそかに虚偽が忍びこむとともに <τὸ μέγα> が両義的に解される。すなわち:

- (5a) 或る F (という性質) そのものはひとつの F (という性質) である。
- (5b) 或る F (という性質) そのものはひとつの F (という性質) を持っている。

first step の述べていることはこれだけである。しかし、(4) は、或る F そのものは F によって特徴づけられる或る集合のすべてのメンバーのうちに含まれ

る一のメンバーでないことを含意している：

(4a) 或るFそのもの自身は、それを持つことによってFとして特徴づけられる或る集合のメンバーに属さない。

さて、われわれは、(1), (2), (3), (4), (4a), (5a), (5b) を仮定することによって、second step および 結論部が含意する次の命題を証明しうる：

(6) それを共有することによって或る集合に属するあらゆるメンバーがFという性質を持つところの同じひとつの性質Fそのものの一の無限系列がある。

証明。

(4) により

Fによって特徴づけられる或る集合のすべてのメンバーは、同じひとつのFそのものを共有することによって、その集合のメンバーである。…(i)

(1), (2) により

Fによって特徴づけられる或る集合がある (Wとしよう)。……………(ii)

(i), (ii) により

Wのあらゆるメンバーがそれを共有することによってWのメンバーである一のFそのものがある (これをxとしよう)。……………(iii)

(4a), (iii) により

xは集合Wの一のメンバーでない。……………(iv)

(1), (2) により W は F によって特徴づけられる或る事物の集合であり、

(iv) により x は W に属する一のメンバーでなく、(3), (5b) により x は F によって特徴づけられる或る集合に属しているから

W の集合に属するあらゆるメンバーと x とをそのメンバーの一員とするところの F によって特徴づけられる或る集合がある (これを 'W+x' とせよ)。……………(V)

(i), (V) により

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

集合 $(W+x)$ のあらゆるメンバーがそれを持つことによって $(W+x)$ のメンバーである同じひとつの F そのもの (y としよう) がある。……(Vi)
(4a), (Vi) により

y は集合 $(W+x)$ の一のメンバーではない。……(Vii)
(V) によると同様の理由により

$(W+x)$ の集合に属するあらゆるメンバーと y をそのひとつのメンバーと
するところの F によって特徴づけられる或る集合がある (これを $\{(W+x)+y\}$ としよう)。……(Viii)
(i), (Viii) により

集合 $\{(W+x)+y\}$ のあらゆるメンバーがそれを共有することによって
 $\{(W+x)+y\}$ のメンバーである同じひとつの F そのものがある (これを
 z としよう)。……(iX)
(4a), (iX) により

z は集合 $\{(W+x)+y\}$ の一のメンバーではない。……(X)
(V) におけると同様の理由によって

$\{(W+x)+y\}$ の集合に属するあらゆるメンバーと z とをそのメンバーと
するところの F によって特徴づけられる或る集合がある (これを $[\{(W+x)+y\}+z]$ としよう)。……(Xi)

.....

この議論のタイプは無限に反復可能である。かくして、われわれは、 F によって特徴づけられる或る集合に属するあらゆるメンバーがそれを共有することによって F なる集合のメンバーであるといいうる F そのものの一の無限系列 x, y, z, \dots をえる。そして (6) がこのことを表明している。

Q.e.d.

かくして、パルメニデスの議論の first step と second step の間にはいかなる non sequitur も実際にはないのである。それは概念の両義性を巧みに利用した虚偽的な推論である。すなわちそれは first step における $\langle \tau\acute{o} \mu\acute{\epsilon}\gamma\alpha \epsilon\iota\nu$

είναι〉を self-predicational に使うことによって、また、first step の〈ἐπὶ πάντα ἰδόντι〉, second step の〈ἐπὶ πάντα ἰδῆς〉というリフレインを αὐτὸ τὸ μέγα と τὰ μεγάλα を無差別になすための詭弁的論理の武器に使うことによって展開される虚偽的推論なのである。そして、この虚偽的推論が成り立つ大前提として、この議論の背景にはアイデアをもって性質であると断ずる立場がある。そしてこの立場がアイデアをもって永遠の感覚物なりと批判するアリストテレスの立場に相通うものがあることは一目瞭然である。

4. TMA がプラトンのアイデア論に対して無効であることを主張した者たちのうち Apelt⁷⁰⁾および Cornford⁷¹⁾は、その証拠として『ポリテイア』篇 597 C におけるソクラテスの議論を挙げた。そこにおいては、神は唯一の Bed, φύσις において存立する Bed そのものを創ったのであって二つあるいはそれ以上を作ったのではない、といわれている。なぜなら、彼が二つを作ったとすると、それら二つのものがその性質を与かりもつところのもうひとつの Bed の形相が現われたらうからである (πάλιν ἂν μία ἀναφανείη ἥς ἐκεῖναι ἂν αὐ ἀμφότεραι τὸ εἶδος ἔχοιεν)。Cornford は言っている：「もしもベッドの二つの形相があったなら、それらは同じ秩序に属し、正確に類似的な存在であっただろう。そしてその場合には『その性質をそれらが二つながらに所有するであろう』ところの第三の形相を必要とする理由があったかもしれない。しかし、形相と個々のベッドは同じ秩序に属し正確に類似的な存在ではない。そして、それが、個々のベッドがその性質を持っていると同じ仕方において、その性質を持っているというのはほんとうではない。むしろ、それはその性質であり、それを二重化するなんの根拠もない」。⁷²⁾これに対して、Ross は Apelt および Cornford の論点が TMA の議論が無効であることを証明する証拠としては役立たないという：「もしもベッドの二つのアイデアがあったなら第三のアイデアが存在しなければならなかつたであろうということを証明することは、プラトンの想定するような個物に関係づけられるベッドの一のアイデアがもしも存在するならば第二のアイデアが存在しなければならぬという論点を決して反証するも

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

のではない」。⁷³⁾そして、Vlastos は Ross のこの言葉を Apelt, Cornford の見解に対する ‘an admirably terse refutation’ であると言っている。⁷⁴⁾そして彼自身は、full-strength なかたちでの N.-I.A. がプラトンの理論のうちに含まれていないという Bluck の批判⁷⁵⁾に対して、この箇所を N.-I.A. の証拠として挙げている：‘Were it not for this assumption there would be no reason why there would have to be a third Form, i.e. why the required Form should not be identical with either the first or the second of the supposed Forms.’⁷⁶⁾

しかし、それはほんとうか。否、この主張は甚だしい不条理を生ぜしめる。さて、プラトンの仮定により人間のアイデアが二つあるとしよう。それらを M_1 , M_2 とせよ。Vlastos の主張によれば、N.-I.A. を認めないということは、必要とされているアイデアが M_1 か M_2 のいずれかであってよいということである。けれどもしかし、 M_1 か M_2 をプラトンが要求する場所に置けば、ほんとうに N.-I.A. は消失するか。消失しない。なぜなら、(i) M_1 , M_2 がその性質を二つながらもつところのアイデアが M_1 であるならば、たしかにこの M_1 はそれに与かるところの M_1 とは同じであるが M_2 とは異っている。いやそれにもかかわらず、この M_1 は M_2 と同じなのか。そして異っておりながら同じであるこの M_1 に与かることによって M_1 , M_2 はひとりの人間である私がそれらに与かるところの二つのアイデアであるのか。それとも (ii) M_1 , M_2 がその性質を二つながらも所有するアイデアが M_2 であれば、この M_2 はそれに与かるところの M_1 とは異っておりながら同じなのか。そして、異っておりながら同じであるこの M_2 に与かることによって M_1 , M_2 はひとりの人間である私がそれらに与かるところの二つのアイデアであるのか。あるいはそうでなく、(iii) M_1 , M_2 のアイデアがあるのではあるが、 M_1 のみがそれ自身に等しくある M_1 の性質をもっており、それ自身をそれ自身のアイデアとしてそれ自身を共有し、そして私は M_2 を全然共有せず、もっぱらこの一であって二である M_1 に与かることによってひとりの人間であるのか……etc.

このような考察は不条理を生ぜしめるばかりである。そして N.-I.A. が消失しないということは、これがまったくの誤解だということである。プラトンがこの箇所で言っているのは、Bed の二つのイデアは存在しえないということ、すなわち、各イデアは唯一無二だということ (οὕτως ἐποίησεν μίαν μόνον αὐτὴν ἐκείνην ὃ ἔστιν κλίνη. Resp., 597c3) である。私は二つの人間のイデアを共有することによって一人の人間であるのではない。否、そのようなことはまったく不可能であって、それらが二であって一でないということは、まさにそれらが ὃ ἔστι ἄνθρωπος でないことを示すのであって、それらは、それらがその性質を所有するであろうところのものを求めることにおいて、すなわちそれらの統一を求めることにおいて、イデアではなくたんに個物という論理的身分をもつにすぎないことを暴露しているのである。そして、求められるところの ὃ ἔστι ἄνθρωπος とそれらの間には <χωρισμός> が厳然として存在する。そして、この <χωρισμός> を full-strength なかたちにおける N.-I.A. と混同することを許すなんの手がかりもここには与えられていない。そのような誤解がともかくも生じうるのは、イデアの self-predication が、プラトンの理論のうちに読み込まれうるかぎりにおいてである。しかし、これまた誤解にすぎぬことをすでにわれわれは見たのである。

したがって、われわれは『ポリティア』篇のこの箇所を、Ross の主張および Vlastos のそれに対する賛同に反して、TMA におけるパルメニデスの議論への有力な反証の証拠として使用することができるであろう。なるほど、「ベッドの二つのイデアがあったなら第三のイデアが存在しなければならなかつたろう」ということを証明することは、かならずしも、「ベッドの一のイデアが存在するなら第二のイデアが存在しなければならない」ということを反証することにはならないかもしれない。しかし、これら二つの命題の関係が「ベッドのイデアは唯一でなければならぬ」と「ベッドのイデアが存在するなら第二のイデアが存在しなければならぬ」との関係であるならば、そして、前者が確立された命題であり、後者がイデアの self-predication という偽なる仮定を組み入

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

れることによって成りたつ命題であるとするならば、われわれは後の命題をプラトンのイデア論にとって縁なきものとして拒むことができるのである。

けれども、プラトンがイデアの self-predication を暗に仮定していたと主張する人々は、プラトンがそれを仮定していたことを証明する証拠を対話篇のうちに求め、みつけたと信じた。そして、とりわけそれを『プロタゴラス』篇 330C—D にみいだすことができると信じた。Vlastos は言っている。われわれはこの箇所において「Goblot によって 1929 年にはじめて注意されて以来、プラトンにおける Self-Predication の star instance となったところの、さらに striking ですらある一のテキストを得る。ここにおいてソクラテスはあからさまに Justice は just であり, holiness は holy であると宣言している。彼は誰かが holiness が holy であることを否定することができるだろう, という考えに憤慨して, 『もし holiness が holy でないとすれば, 他の何が holy でありうるであろうか』と問うている」。⁷⁷⁾ Robinson は言っている: 「ソクラテスは “Justice is Just” を “Justice is Justice” という命題と混同しているから “Justice is Just” と考えているのではなく, Justice が Just か unjust でなければならないと仮定するから “Justice is Just” と考えるのである」。⁷⁸⁾ Ross, Runciman, Geach などこの箇所がイデアの self-predication をプラトンが認めていた証拠として理解している。

しかし、はたしてそうか。私はこの主題に関してもはや周到に論究する余裕がないが、ここでのプロタゴラスとソクラテスの対話において問題となっているものがたとえイデアであるとしても,⁷⁹⁾ そのイデアをめぐってのソクラテスの発言は、意識的に虚偽的なものであるという Sprague⁸⁰⁾ の意見に賛同したい。「私自身は、ソクラテスが 330C において『正義は或る物か、それとも、そうでないか』(ἡ δικαιοσύνη πρᾶγμα τί ἐστίν ἢ οὐδὲν πρᾶγμα) とプロタゴラスにたずねるとき、彼はわざとそのソフィストを誤ちに導いているのであって、彼はプロタゴラスを説得して、プロタゴラスに正義を個々の正しい行為と同じクラスに置かせようとしてその質問をしているのだと思う。プロタゴラス

がそれをやる時、そのときには……このもの、つまり正義が正しいかそれとも正しくないか、とたずねることが理にかなっていると思われる。……『正義は正しい』という陳述を用いてするこの議論は、思うに、一連の意識的に虚偽的な議論の一段階であるようだ……。⁸¹⁾ Sprague は、Euthydemos 篇 300E—301C におけるソクラテスとソフィストであるディオニュソドロスの問答において、ソクラテスが自分の *μέθεξις* 論へのソフィストの詭弁的攻撃に対して意識的に虚偽的な手段（「美は美しい」、「異は異っている」といったアイデアの self-predication を使ったの）を用いてソフィストを反撃しているのだということを効果的に示した。⁸²⁾ Robinson の論点は、それが全体の議論の文脈の中において見られるときストレートに正しいものではなくなる。Justice が Just か unjust でなければならぬと、なるほどここでのソクラテスは示唆しているが、その示唆はソクラテスの本来的主張ではなく、プロタゴラスの主張を矛盾に導くために彼によって採用された意識的な虚偽である。われわれは、要するに、『プロタゴラス』篇のこの箇所を、一義的に、アイデアの self-predication をプラトンが認めていたことを証明するための決定的な証拠としては使用しえないのである。アイデアの self-predicational な陳述とみえるものは、かくして、一方ではその自同的關係を述べる同一性命題であり、他方では意識的に虚偽的な陳述であるということが帰結する。

さて、われわれが以上考察してきたところによると、第一部におけるどの議論も、プラトンの理論に対してストレートに有効ではないということが判明した。すなわち 128E にはじまる若きソクラテスのアイデア論の呈示を受けて老パルメニデスが展開したアイデア論批判のいずれもが、プラトンのアイデア論を支える根本的前提の或る歪曲を通じてなされる虚偽的な議論であることをわれわれは見た。そして、この歪曲は、とりわけ、131E—132B における「第三人間」論と 132C—133A における Copy—Theory との二つの無限背進論において巧妙かつ周到に展開されており、とくに「第三人間」論は最近十年間におけるプ

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

ラトン解釈の一の焦点をなすものであるので、私の議論もまた、おのずからこのものに向けられたのである。パルメニデスは、ソクラテスの仮定からすれば、各アイデアは唯一でなければならぬはずだが実際にはそうならないことを、すなわち各アイデアは唯一でなく無限多になることを推論に訴えて示そうとした。私はその推論そのものの形式には破綻をみいださなかった。しかし私は、ここでのパルメニデスがアイデアの self-predication を仮定し、さらにその仮定を支える根本的前提として、アイデアをもって性質となしていることに、プラトンのアイデア論の歪曲を見た。かくして、われわれはパルメニデスの議論が誤まった前提を使用しての虚偽的のそれだということを知ったのである。しかしながら、この議論を構成したのはプラトン自身なのである。何故プラトンはこのような議論を構成しなければならなかったのか。彼は何を意図したのであるのか。この第一部の目的は何なのであるのか。これを述べるためには、われわれはパルメニデスのいう「骨の折れる遊戯」たる第二部を考察しなければならない。稿を改めてこれを述べることにしよう。

- 1) Met., 990b15—17.; cf. 1039aff., 1059b8ff; Soph. El., 178b36—179a10.
- 2) Aristotelis opera Graece ex rec. I. Bekkeri ed. Academia regia Borussica. IV. Scholia coll. C. A. Brandis. 1836., 565b11—566b18.
- 3) W. D. Ross, Aristotle's Metaphysics, vol. 1, 195.
- 4) Cornford, Plato and Parmenides, London, 1939. 3 impr. 1951., 90.
- 5) G. Vlastos, 'The Third Man Argument in the Parmenides', Phil. Rev., LXIII. 1954. reprinted in 'Studies in Plato's Metaphysics', edited by R. E. Allen, London, Routledge & Kegan Paul. 1965. 254.
- 6) Op. cit., 259.
- 7) J. Burnet, Greek Philosophy, Part 1: Thales to Plato, London, Macmillan, 1914., P. B. 1962. 254; A. E. Taylor, Plato, the Man and his Work, London, 1926. Fourth. Ed. 350.

Burnet, Taylor のいわゆる 'parody-theory' は、Cornford によって却下された。また、Robinson は、彼の Plato's Earlier Dialectic (1953) において、Chernis をも含めて、'parody-theory' をきわめて鋭く批判した。また、いわゆる 'Principle of Historicity' もほとんど完膚なきまでに批判された。けれども、Robinson の議論は、『パルメニデス』篇第二部についての私の解釈

の中で触れるときに詳論するつもりであるが、すべてかならずしも良いというわけではない。けれども、われわれは一応、いまは、Burnet-Taylor 説なるものがほとんど批判しつくされたものとしておきたいと思う。

8) Op. cit., 355—356.

9) 本文において、これら各議論の内容を紹介することは、或る人々にとっては煩瑣であろうし、また、与えられた紙数を浪費することにもなるであろうから、これらの議論を私は本文においては紹介しない。しかし、何が問題であったか、議論の道筋はどうであったかを参照することができるように、この場所を借りて、きわめて簡単に敘述しておきたい。

A. パン・アテーナイ大祭にパルメニデスとゼノンがやってきて、城外にあるケラメイコスのピュトドロスの家に滞在している。そこへソクラテスをはじめ若干の人たちがやってきて、ゼノンに彼の論文を読んでもくれるように頼む。ゼノンが読み上げおわると、ソクラテスは第一論文第一假定をもう一度読んでもくれるよう頼み、それがなされると次のように言う。「それはどういうことですか、ゼノン。存在するものが多であるなら、それは類似的でもあり非類似的でもあるのでなければならないが、しかしこれは不可能である。なぜなら、非類似的なものが類似的であることも、類似的なものが非類似的であることもできないから。こうあなたはおっしゃっておられるのではないですか」。ゼノンが肯定すると、ソクラテスは、ゼノンの目的とするところが、多が存在しないことを証明するにあるのであって、それは結局、パルメニデスの万有が一であるという説を形を変えて言っているにすぎない、という。これに対してゼノンは、ソクラテスが自分の論文の真の意図を決して把んではいない、この論文は、パルメニデス説を批判する多元論者の假定「多であるならば」を取りあげ、それを十分に検討するならば、彼らの説のほうがよくはおかしなことになることを指摘して、パルメニデスの一を擁護することを意図した若かりし日の自分によって書かれたものである、と打ち明ける(127A—128E)。このゼノンの言葉を一応受け入れ、次にソクラテスは、ゼノンの多の論駁に答えるべく、イデア論を提出する。それは次のような言葉で始まっている：「類似性の形相 それ自体というようなもの (*αὐτὸ καθ' αὐτο εἶδος τι ὁμοιότητος*) やまた別のそれらとは反対なまさに非類似的であるところのものというようなものがあって、私やあなたやその他われわれが多であると呼んでいるところのものは、これら二つの形相に与かるのだとはお考えにならないですか」。ソクラテスは、類似性の形相に与かるものは類似的になり、非類似性の形相に与かるものは非類似的となり、両者に与かるものは両方になるとするならば、同じものが同時に類似的でも非類似的でもあるということになんの不思議があらうか、といっている。ここにおいてソクラテスは共有 (*μέθεξις*) 論をもっ

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

てゼノンの多の論駁に対する解答となしているのである。その際、彼がアイデアを「思惟によって理解されるもの」(τὰ λογισμῶ λαμβανόμενα), アイデアに与かるものを「見られるもの」(τὰ ὁρώμενα)と呼んでいること(字義どおりには, ἐν τοῖς λογισμῶ λαμβανομένοις, ἐν τοῖς ὁρώμενοις 130A1,2)は注目に価いする。このソクラテスのアイデア論の提示を受けて, パルメニデスはソクラテス自身がアイデアそのものとそれらに与かるものという区別をなしたのかと問い, ソクラテスが肯定すると, パルメニデスはさらに, いかなる物がそれに対応するアイデアをもつか, と問う。類似性, 一, 多といったアイデアについては, ソクラテスはその存在に疑いをもたない。また, 正義, 美, 善のようなものすべてのアイデアについても同様であるが, 人間とか, 火とか, 水とかのアイデアの存在については, ソクラテスは困惑し, どういうべきか迷う。そして, パルメニデスが髪の毛とか泥とか塵とかの下らないものについてもそれぞれに独立的アイデアがあると考えているのか, と質問するに至って, ソクラテスはまったく困惑し, それらにもアイデアがあると考えるのはきわめて不条理であるかもしれない, と答える。

B. パルメニデスは, アイデアそのものについてはそれ以上言及せず, ソクラテスが個物とそれに対応するアイデアとの関係を表わすのに用いた μεταλαμβάνειν という語をめぐる批判を展開する。個物はアイデア全体に与かるのか, それともその部分に与かるにすぎないのか。ソクラテスはアイデア全体が各個物に内在することに何のさしつかえをも感じない。しかし, パルメニデスは, もしアイデアの全体が分離してある多くのもののうちに内在しているのだとすれば, それは自己から分離して存在することになると, 論ずる。さらに, それはあたかも多くの人の上に一枚の帆布をひろげるようなものであるが, 各人のうえにあるのは帆布の一部のみであるということになる。すなわち, アイデアそのものが可分割的であって, それを共有するものはアイデアの全体を共有せず, その部分を共有するにすぎないことになる。しかしわれわれは, 個々の大きい事物は大そのものより小である大(そのもの)の部分によって大きいとか, 何物かに等しくあるものは等そのものより小である等(そのもの)の部分を有するゆえにそのものに等しくある, とかということとはできない。ましてや, 小さい事物の各々が小(そのもの)の一部分をもっているとするなら, 小(そのもの)はそれより大きい, そして, 小さい事物ははじめそれが欠いていた小(そのもの)の部分をえるのだとすれば, それはその付加によって大きくなるかわりに小さくなる, ということにいたっては不条理の極みである, と論ずる。

Γ. パルメニデス「君はなにかこういったことからそれぞれの場合に一の形相があると考えるのだと, 私は思う。すなわち, 多くの事物が大きくと君に思われる場合, 君にはたぶん, それらすべてを見ることによって, なにかひとつの同

じ性質があると思われるのだろう。そこで君は大($\tau\acute{o}$ μέγα)がひとつのものであると考えるのだろう。」

ソクラテス「ほんとうにそうです。」

パルメニデス「しかしそれでは大そのもの($\alpha\upsilon\tau\acute{o}$ τὸ μέγα)と他の大きいものども($\tau\acute{\alpha}\lambda\lambda\alpha$ τὰ μεγάλα)についてはどうか。君がそれらすべてを同じようにして心眼でもってみわたすならば、それらのすべてがそれによって(ϕ)大きくみえるところのもうひとつの大きが現われてくるのではないか。」

この議論のタイプは無限にくり返され、かくして各形相はひとつではなく数において無限になるとパルメニデスは指摘する。

4. ソクラテスはこのアポリアから形相を救いだすために、各形相はただ精神の中にのみみいだされる思惟($\nu\acute{o}\eta\mu\alpha$)だとすれば、各々はその単純さを保ち、いままでに提起された批判を免れうるのではないか、と示唆する。しかしこれに対してパルメニデスは、思惟はつねに或る物についての思惟、存在する或るものについての思惟であり、多くの事物に共通して認められる或るひとつのものについての思惟であって、この共通的なひとつのものとはすべてにわたってつねに同じである形相ではないか、と論ずる。そしてさらに、ソクラテスの主張によれば、他の事物は形相に与かるのであるから、その主張とソクラテスの今の主張を合わせ考えるなら、事物は思惟に与かるのだということになるが、このことはあらゆるものが思惟から成り、かくしてあらゆるものが思惟するか、それとも思惟しないところの思惟もあるかである、ということを意味しなければならない、と論ずる。

E. ソクラテスは形相が $\nu\acute{o}\eta\mu\alpha$ であるとするものの不条理を認め、それに代えて、事物の形相に対する関係は、写像($\acute{o}\mu\iota\omega\mu\alpha\tau\alpha$)の原型($\pi\alpha\rho\alpha\delta\epsilon\acute{\iota}\gamma\mu\alpha\tau\alpha$)に対する関係であって、事物が形相に与かるとは、それらがアイデアを模写すること($\epsilon\iota\kappa\alpha\sigma\theta\eta\nu\alpha\iota$)にはかならない、と力説する。これに対して、パルメニデスは何物かが形相に似ているなら形相もそのものに似ている、類似的なものが類似的なものに類似していないなどということとはありえない。類似的なものは類似的なものに同じひとつのものを共有しているからこそ類似しているのであって、その共通なものとは形相である。すると、何ものかが形相に似ているとか形相が他のものに似ているとかいうことはありえないのであって、もしソクラテスのいうように事物が形相の写像であるとすれば、その形相の他につねにもうひとつの形相が現われ、このことは止むことなく無限にくりかえされる、と批判する。

H. パルメニデスは次にさらに大きな困難、経験豊富な賢い人でなければ、また、それについて行こうと努力するのでなければ、それが偽であることを指摘しがたい別の困難について語る。彼が導こうとする結論は、形相が不可知のもので

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

あるという結論である。すなわち相互関係において形相であるところのものはすべて、それらの存在をそれら自身との関係において有し、われわれの世界にあるものとの関係において有するのではない。また、われわれのところであって形相と名を等しくするものも自分との関係においてあるのであって、形相との関係においてあるのではない。たとえば、われわれのうちの誰かが誰かの主人であれば、彼はわれわれのうちの一人である奴隷の主人であって、まさに奴隷である奴隷そのものの主人でない等々。そこで、真に知識であるところの知識そのもの(*αὐτὴ ἐπιστήμη ὃ ἔστι ἐπιστήμη*)はまさに真理であるところのものの真理であって、われわれのところにあるものとの関係において真理であるのではない。われわれの有する知識はすべてわれわれの世界に存在するものとの関係における知識である。かくして、われわれは真の知識を所有しないのであるから、結局われわれは形相を知ることができない。しかし、さらに恐るべきことがある。誰にしても神ほど正確な知識をもっている者はないと主張するであろう。しかし、真の知識はイデア界におけるものにのみ関係的であって、われわれの世界におけるものには関係をもたないのであるから、神の知識はわれわれの世界における何物の知識でもなく、したがって神はわれわれの主人でもなく、また、人間的な事柄についても何も知らないのである。

- 10) Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, Oxford, Sec. Ed. 1953. 229—230.
- 11) Cornford, *Op. cit.*, 97.
- 12) D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford. 1951., 90.
- 13) プラトンは、しかしこれに答えなかった。それは彼がこの批判に対して与えたであろう答は、彼にとってもっとかぎりなく重要である問題を解決することにならなかったからだ。Vlastos, *Op. cit.*, 258.
- 14) プラトンがこの議論を有効だと考えなかったことは明らかだ。何故ならそれは不可避免的に全イデア論を破壊することになっただろうからだ。W. G. Runciman, 'Plato's Parmenides' *Harvard Studies in Classical Philology*, LXIV. 1959. Allen., 160.
- 15) Ross, *Op. cit.*, 90.
- 16) R. Hackforth の秀れた論文 'Plato's Theism' (1936) 参照。
- 17) Cornford, *Op. cit.*, 92.
- 18) G. E. L. Owen, *The Place of the Timaeus in Plato's Dialogues* (1953).
- 19) H. F. Cherniss, *The relation of the Timaeus to Plato's late dialogues* (1957).
- 20) *Op. cit.*, 86—87.
- 21) *Op. cit.*, 86.

- 22) Op. cit., 155.
- 23) Op. cit., 88.
- 24) Op. cit., 153.
- 25) Op. cit., 152.
- 26) Op. cit., 255—257.
- 27) Cornford, Op. cit., 93—95.
- 28) Ross, Op. cit., 88—89.
- 29) Runciman, Op. cit., 158.
- 30) 「明らかに、もしも *a* と *b* が類似しているなら、それらは少くとも、ひとつの点において類似していなければならない。もしも、*a* と *b* がともに白いなら、それらは相互に白くあるという点において類似しており、それらが類似という仕方
で共有するといわれる白さの形相によって表明されるところの同じ特性のゆえに類似しているのである。」 Vlastos, Op. cit., 242.
- 31) Vlastos, Op. cit., 241—244.
- 32) Cf., Tim., 29B, 48C, 49A, 50D; Politicus, 285D—286; Phdr., 250A6—D6, 247D—E, 249B6ff., 263A—B.; Aristot., Met., 987B11—14., 1034A2—3; Xenocrates, frag. 30 (Heinze)=Proclus, In Parmenidem, col. 888, 17—19 & 36—7 (Cousin²).; Speusippus, frag. 4, 16 (p. 54 [Lang]); Theophrastos, Met., 5a 25—8 (Ross and Fobes). cf. Cherniss, Aristotle's Criticism, I, pp. 256—7, 259. cf. Cherniss, The Relation of the Timaeus to Plato's later dialogues, pp. 361—362.
- 33) 「私の両手は手であることにおいて相互に似ている。それらはこの点において(手であるという点において)『手そのもの (Hand Itself)』にも似ているか。明らかに否である。なぜなら、もろもろの手の the Hand への関係は、プラトンの説明に基づけば、もろもろの手のもろもろの写像あるいは映像ともろもろの手の間の関係にアナログスだからである。それゆえ、もしも『プラトンのメタフォアの論理』が the Hand が *a* hand であることを含意するなら、それはまた、*a* hand の写像が *a* hand であるということをも含意するはずだが、これは不合理である。もろもろの手のもろもろの写像は、色や形などにおいてもろもろの手に類似するが、もろもろの手ではない。」 (R. E. Allen, 'Participation and Predication in Plato's Middle Dialogues', Phil. Rev., LXIX. 1960. cf. Studies in Plato's Metaphysics, 48)
- 34) Allen, Op. cit., 48—51.
- 35) Text をもう一度ふりかえってみよう。〈…ἀλλ', ᾧ παρμενίδῳ, μάλιστα ἔμοιγε καταφαίνεται ὥδε ἔχειν τὰ μὲν εἶδη ταῦτα ὥσπερ παραδείγματα ἐστάναι

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

ἐν τῇ φύσει, τὰ δὲ ἄλλα τούτοις εἰκέναι καὶ εἶναι ὁμοιώματα, καὶ ἡ μέθεξις
αὕτη τοῖς ἄλλοις γίγνεσθαι τῶν εἰδῶν οὐκ ἄλλη τις ἢ ἐκασθῆναι αὐτοῖς.>

(But, Parmenides, the best I can make of the matter is this: that these Forms are as it were patterns fixed in the nature of things; the other things are made in their image and are likenesses; and this participa-

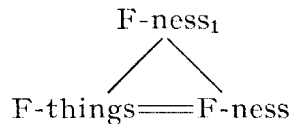
^(イ)tion they come to have in the Forms is nothing but their being made in their image. Cornford 訳) (下線筆者)。このソクラテスの示唆において、

(イ)が言っているのは、イデア以外の事物のイデアに対する関係は、イメージあるいは類似物のオリジナルあるいはパターンに対する関係であるということ、すなわち、イデア以外のものは、比論的に、そのイメージあるいは類似物だということである。(ロ)はこのことを μέθεξις のコンテクストにおいても一度強調しているのである。

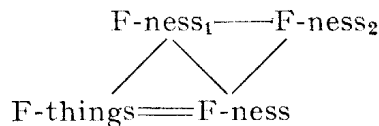
36) Cf., Cherniss, The relation of the Timaeus to Plato's later dialogues, 365.

37) Op. cit., 366—369.

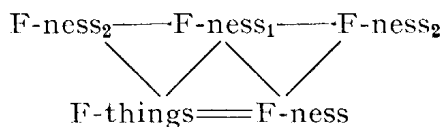
38) 私は Cherniss の議論をもっと簡単にしよう。私は便宜上, Vlastos の記号を用いよう。さて, パルメニデスの議論によれば, F-things と F-ness が相互に類似しているのは, それらがともに F-ness でない別の形相 F-ness₁ を共有するからである。



ところで, F-things と F-ness と F-ness₁ がすべて類似的であるのは F-ness₂ をそれらすべてが共有するからである。F-ness と F-ness₁ は F-things と F-ness が類似しているように類似しており, それはそれらが F-ness₂ を共有するからである。

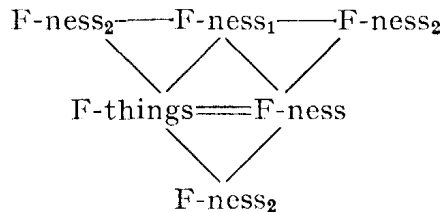


また, F-things と F-ness₁ も相互に類似的であり, それらは F-things と F-ness と F-ness₁ とがその点において相互に類似的であるところの <—にして同じ点において>類似している。すなわち



F-things と F-ness₁ は F-ness₂ を共有することによって相互に類似している。

同様に、F-things と F-ness は、F-things と F-ness と F-ness₂ が相互にその点において類似していると＜同じ一つの点において＞類似している。したがってそれらは F-ness₂ を共有することによって類似している。



すなわち、F-things と F-ness とが相互に類似的であるのは、F-ness₁ をそれらが共有するからでもあり、F-ness₂ を共有するからでもある。かくして、F-ness₁ と F-ness₂ は一にして同じものである。しかしこのことは、パルメニデスの仮定にしたがえば不可能である。なぜなら、もしもそれが可能であれば F-things と F-ness の双方は F-ness を共有することによって相互に類似的でありえ、無限背進は生じなかつただろうからである。

- 39) Vlastos, Op. cit., 232—237.
- 40) P. T. Geach, 'The Third Man again', Phil. Rev., LXV. 1956. cf. Allen, 265.
- 41) Vlastos, Op. cit., 237—241.
- 42) Geach, Op. cit., 266 ff.
- 43) Vlastos, Op. cit., 232—233.
- 44) Vlastos, Op. cit., 252, n.l.
- 45) A. L. Peck, 'Plato versus Parmenides', Phil. Rev., LXXI. 1962, 162 ff.
- 46) Vlastos, ibid.
- 47) Cf. Prot., 330C, 331B; Phd., 74B, D, 100C; Hipp. Maj., 289C, 291E, 292E, 294A—B; Lysis, 217A; Symp., 210E—211D.
- 48) Vlastos, Op. cit., 248 ff.
- 49) Vlastos, Op. cit., 252.
- 50) Peck, Op. cit., 160.
- 51) Allen, Op. cit., 52.
- 52) Cf. Vlastos, Op. cit., 250.
- 53) Vlastos, Op. cit., 253—254.
- 54) この Vlastos の言葉は, Cherniss, Aristotle's criticism of Plato and the Academy, I. 1944. 293—300 における Cherniss の TMA 解釈に対する異議を述べるものとして構成されている (Op. cit., 253—254. n.l) が, この異議に対して, Cherniss は 'The Relation of the Timaeus to Plato's later Dialogues',

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

1957. において反論した。

55) Geach, Op. cit., 267.

56) Ibid.

57) Geach, Op. cit., 276.

58) Vlastos, 'Postscript to the Third Man: A Reply to Mr. Geach', Phil. Rev., LXV. 1956. Cf. Allen, 284.

59) Cf. Allen, 47.

60) 『田中美知太郎全集』第一巻所収『ロゴスとイデア』中「イデア」参照 234 頁。言葉使いのみ改める。

61) Rep., 507B5—7; Phd., 75C10—D2, 78D1—7; Symp., 211C7—D1; cf. Cherniss, Op. cit., 372.

62) Allen, Op. cit., 50—51.

63) すでに本文において述べたように, Peck は, Vlastos がソクラテスがイデアを $\tau\acute{\alpha}$ λογισμῶ λαμβανόμενα, 個物を $\tau\acute{\alpha}$ ὁρώμενα と表現することによってなした区別を見逃しているから, ここでのパルメニデスの議論が虚偽的であることに気づかないでいると論ずることにより, 進んで, パルメニデスがこの区別に忠実に彼の言葉を述べていたら, 彼の議論は難破していただろう。たとえば, TMA の第一段階を (A₁) 多くの個物 a, b, c, の各々のうちに K-ness (H) があるならば, それのゆえに, a, b, c の各々のうちに K-ness (H) が存在するところの一の単純な形相 K-ness (L) が存在しなければならない。[H は ὁρώμενον の, L は λαμβανόμενον の頭文字を取っている]

というふうに言い表わしたならば, 第二段階に進むことはできなかつただろう。しかし, パルメニデスはどのような種類の区別にも関心を払わず, 彼が「大きい」というとき, それはたんに抽象的なものにすぎず, それにあたる記号は K (O) とか K-ness (O) とか, つまり in vacuo の K あるいは K-ness を使わなければならぬとし, TMA のパルメニデスの議論を次のように表現する。

(P₁) もしも多くの事物 a, b, c のうちに K-ness (O) が存在するならば, それゆえに a, b, c の各々のうちに K-ness (O) が存在するところの単一の形相 K-ness (O) が存在しなければならない。

(P₂) われわれはいまや, それらのすべてが K (O) である a, b, c と形相とを有している。唯一の変化は, われわれがいまや余分の一の K (O) を有しているということだけである。そこで, 君の理論によれば, それのゆえにそれらの各々が K (O) である単一の形相が存在せねばならぬだろう。そしてこれは別の形相 K (O) であるだろう。

しかしながら, Peck のこのパルメニデスの議論の定式の仕方は, プラトンの理

論を表現するにはよいかもしれぬ「a, b, c のうちに」とか「a, b, c の各々のうちに」とかの表現を、実際のパルメニデスの議論にはみいだされないにもかかわらず、使用しているという不都合な点がある。また、K (O) とか K-ness (O) とかの記号表現における (O) は、ここでの議論において何が真に問題であるかをあいまいにする働きをしかなししていない。問題なのは、アイデアと個物が同じ性質をもつという虚偽であるかぎり、それを適切に表現する機能をもつ記号を使用しなければなるまい。「パルメニデスはどのような種類の区別にも関心をもっていない」のではなく、区別をなしながら無差別をよそおっているのであって、そこに虚偽がひそむのである。

- 64) Geach が TMA の分析のために提出している基本的命題は次のようなものである。「(1) 形相ならぬ多数の F から成る一のセットがある。(2) もし x が、それによって y が一の F たりしめられる一の形相だとすれば、y はそれにより x が一の F たりしめられる一の形相ではない。(3) もしも A がいくつかの F から成る一のセットであり、x は A に属さない一の F だとすれば、x とともに A のメンバーを含むもろもろの F の一のセット ('A+x' セットと呼ぶ) がある。(4a) 或る F はそれによりあらゆる他の F が F たりしめられる一の形相である。(4b) いくつかの F から成る任意のセットは、それらすべてがそれ自身一の F である一の形相によって、もろもろの F たりしめられる。(2a) x それ自身は、それによって x が一の F たりしめられるところの一の形相ではない」。これらから Geach は、(5) 「それによりあらゆる他の F が F たりしめられる一の形相たるただひとつの F がある。」、(6a) 「それによって、あらゆる他の F が F たりしめられるところの、その各々が形相である F の一の無限系列がある」を導きだし、これら (5) および (6a) をもって、TMA の formal reconstruction であるという (Op. cit., 271—274)。けれども、Vlastos の指摘するとおり、(5) を述べるために、Text になく (2) と (4a) という暗黙の仮定なるものを導入し、そしてそれらからこれを演繹するというやり方は正当なやり方であるとは考えられない。また、もしも、(3) がプラトンによってたしかに仮定されていると断言できれば、TMA の第一ステップと第二ステップの間には、実際、なんらのギャップもないことになる。しかし事実はむしろ、(3) は第一ステップにおいて述べられていることから推論としての第二ステップの中に含まれているのである。論証しなければならぬことを前提することが許されるなら、Geach の議論は正当である。
- 65) Vlastos, Postscript., 280.
- 66) Ross: プラトンはどこにおいても、パルメニデスの議論に答えていない。しかし彼はアイデア論を主張しつづけた。だから明らかに彼はその議論を自分の理論に

「第三の人間」(あるいは「無限背進」)について

致命的なものであるとは考えなかった。しかし、実際には致命的であって、イデア論そのものに対してではなく、プラトンがその理論を定式化した言語に対して致命的である。議論が向けられているところの“与かる”とか“模倣する”といった言い方は、個物のイデアへの関係を表現するには不適切な metaphor のようなものである、というのは、それらはともに、イデアをあたかも一の事物であるかのように扱い、事物の一性質としては扱わないからである。プラトンの“x—自体”(αὐτὸ τὸ) という句の使用も同じ批判にさらされている。…その誤りは、そのもっとも決定的なかたちで Prot. 330C2—E2 に生じている。そこでは Justice は Just であり, piety は pious であるといわれている。Op. cit., 87—88.

Runciman: 重要な事実、プラトンが一の attribute の任意の事例は、たとえそれが一の形相であっても、個物という論理的身分をもたねばならぬということをはっきり認めることに失敗したということだ。第三人間論は、(プラトンはそれを覚っていないけれども) イデア論を根本的に損う一の誤りを顕わにしているのである。Ryle 教授は、したがって、プラトンは、self-predication の論理的不当性を覚るにいたった、と結論している。しかし彼がそれを十分に意識していたならば、その理論がたんにその解こうとする問題を一つの異ったレベルのうえにふたたび創りだすにすぎないのであるから、その理論が落第だということを見ていただろう。Op. cit., 156.

Taylor: 厳密な論理においては、この推理は決定的ではない、というのは、それは一の述語と同一性の確言との間の混同に拠っているからだ。たとえば、David と Jonathan とは一ペアーの友であり、Orestes と Pylades とは他のペアーである。双方のペアーは共通に或るものをもっている。すなわち、各々のメンバーの数である、基数 2 を持っている。しかし、数 2 はそれ自身は一のペアーではない; それは一の 数である、そして一の 数をもっている (have) とはいわれえない。プラトンの目的はたんにエレア学派の者たちのソクラテスの教説に対する批判を、彼ら自身の方法が彼ら自身の理論に対してもっと手ひどい効果でもって仕返しされるということを示すことによって、彼らの手もちの札より上の札をもっているのだということを示そうと、再構成することなのであるから、われわれは彼がこの論理的欠陥に気づかなかったと想定する必要はない。Op. cit., 355.

Cornford: この議論も「上に注記した」両義性に依っている。形相、大それ自身が多くの大きい事物がそれを持っていると同じ仕方でその性質を持っていると仮定されている。換言すれば、それはそれ自体が一の大なる事物である。もしもそうなら、それはまさに大きい事物のクラスに属するもうひとつのメンバーであり、多くのものが分有するためのオリジナルな形相を要求する理由があったよう

に、それが分有するためのひとつの第二の形相を要求する理由があっただろう。かくしてわれわれは無限背進をえるだろう。プラトンはこの第三人間の批判にここでは答えていない。しかしこの批判に反証を与える議論を別のところ (Rep., 597C) で与えている。Op. cit., 88—90.

- 67) Apelt, Platons Dialog Parmenides, Der philosophische Bibliothek, Bd. 83, Leibzig. 1922. 60.
- 68) 'ἰδέα here ((as in the Phaedo)) means the character supposed to be possessed both by the Form and by the things which partake of the Form.' Cornford, Op. cit., 88.
- 69) Apelt, Op. cit., 60.
- 70) Apelt, Beitr. 2 Gesch. d. Gr. Phil. 53.
- 71) Cornford, Op. cit., 90.
- 72) Cornford, Ibid.
- 73) Ross, Op. cit., 87.
- 74) Vlastos, Op. cit., 259. n.l.
- 75) Bluck, 'The Parmenides and the "Third Man,"' Class. Quart., N. S. VI (1956), 29 ff.
- 76) Vlastos, Addendum., 263.
- 77) Vlastos, The Third Man, 249.
- 78) Robinson, Op. cit., 238.
- 79) ここで、プロタゴラスとソクラテスが対話の主題にしているのは、イデアではまったくない、とPeck はいう。Op. cit., 173.
- 80) Rosamond Kent Sprague, Plato's Use of Fallacy, 1962.
- 81) Sprague, 27—28. n. 14.
- 82) Sprague, Op. cit., 25—27.

—1969. 8. 30—